

町民参加の町史づくり



竹富町史たより

第40・41合併号

2018年3月30日



竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町6-18

TEL(0980)87-6257

目 次

黒島東筋の旧正月大綱引き	1
玻座真 武 黒島ノート	玻座真 武… 2
『竹富町史 第三巻 小浜島』正誤表	59
波照間島の自然	島 村 賢 正… 60
2017年度竹富町史編集委員会	63
竹富町史編集委員会・編集係2017年度の動向	65
島じまの踊り・狂言〈No.2〉曾我兄弟	69
2017年度受贈図書	70
刊行物一覧	72
編集後記・奥付	73

黒島東筋部落の旧正月大綱引き

黒島の旧正月は、東筋と仲本の集落において、村をあげて大綱引きが行われるところに特色があります。大綱引きは、「世」(豊穰)を乞い願って綱を引く「世引キ事」として、新春を寿ぐ儀礼です。つまり、年頭にあたり、来る年の豊凶を大綱引きで占う村行事として継承されています。

東筋部落では午後、古謡《正月ユンタ》を繰り返すうちに村人は中道に集い、次第に晴れやかな気分がみなぎってきます。やがて歌にも弾みがついてくると、南北双方から踊り上手が中央へ進み出て即興で踊りだします。

《綱引きユンタ》を歌った後、南北それぞれから武者を装う者が板台に乗って登場します。台上の北の武者は鎌を持ち、南の武者は槍持って構えています。南北の板台が、道の中央で合わされるや、両者は激しく打ち合います。この勝負を綱引きによって決着すべく、綱又耳寄シへと続き、いよいよ大綱引きが始まります。老若男女が「世」を引き寄せようと力いっぱい綱を引き、抽象的な「世」を理屈抜きに体感するのです。

大綱引きが終わると、《弥勒迎え》の歌謡を伴って、北から弥勒神、南から筑登之が登場します。弥勒の背後には、穀物とサツマイモを盛った籠を捧げ持つ、白眉白髭の長者が控えています。そして、中道の中央で長者が筑登之に種子籠を手渡して双方に分かれます。この五穀の授受に一切の言語表現はありませんが、村人の歓喜をみれば、この儀礼が村の豊穰を表した象徴劇として皆に承知されていることが分かります。

このように《正月ユンタ》《綱引ユンタ》《弥勒迎え》などの歌謡によって劇的に進行していく大綱引きは見どころ満載です。この旧正月(2018年2月16日)は大綱を51年ぶりに素材をワラに新調したり、また「平成29年度地域文化遺産総合活用推進事業 黒島活性プラン」で大綱引き衣装を40数年ぶりに「復元」したのも見どころでしょう。

衣装については、「元々の姿が改造されたり、変化してしまった現状の姿を元通りの姿に戻す」(復原)ではなく、「失われ消えてしまったもの」を記憶や資料、履歴調査、現行の民俗行事などと比較検討しながら、「新たにつくる」「再現する」(復元)の道を選択し、それによって伝統行事を継承していこうという試みでもあります。



(八重山毎日新聞社提供)



(八重山毎日新聞社提供)

玻座真 武 黒島ノート

一玻座真 武氏遺稿集一



はじめに

黒島^{フシマ}（さふじま）は、面積9.83平方キロメートル、周囲12.62キロメートルで、ハート型の形状をなしている。島全体が隆起珊瑚礁から成り、最も高い標高でも15メートルほどしかない。このように、黒島は平坦で、山、川、田んぼのない、いわゆるヌングンジマ（野国島）に分類され、山、川、田んぼのあるタンゲンジマ（田の島）とは対照的である。

島が低く平らであるのは、「昔、神様が黒島に山をかついで運ぼうとしたが、途中で山を小浜島に落とした」（『さふじま』43頁）からという民話でも語られている。島民性を考えたとき、近年は「ハートの情け島」ともいうように、一般的に島人はやさしくおとなしい性格の方が多いといえるだろう。

黒島の古謡や民謡には、宮里、仲本、東筋、伊古、保里、保慶の六つのムラ（集落）がうたわれているが、それらが歴史のなかで移転・統合して、現在の五集落につながっている。

人頭税時代の島人は過酷な暮らしを強いられたであろうが、その中でうたわれたジラバ、アユウ、ユングトゥといった古謡にはユーモアや明るさがにじみ出ているものも多い。それらのなかには役人の手によって改作されたものもある。また、黒島の人々の暮らしが集落ごとに、海の魚介類と、陸の植物、穀物、動物と対応させながらうたわれている歌謡群がみられる。

これは黒島が「タキフンツァ」（竹の床）にたとえられて表現されたり（《島廻りじらば》参照）、^{キムビシ}「肝一^{イロビシ}チ・色一チ」といった平等的配慮がなされ、そのような考え方が行事や芸能などにも表われたものと思われる。「庭の芸能」の獅子舞も、東南アジア系統の「狩りの儀式の舞」に通じる一連の舞であるにもかかわらず、「タイラク」（保里村）・「獅子の棒」（東筋村）・「獅子廻し〈雌獅子〉」（宮里村）・「獅子廻し〈雄獅子〉」（仲本村）というように、各村がそれぞれを担当して継承しているのである。

「肝一チ・色一チ」という言葉は、島人の温和な人柄を表しているが、日々の暮らしにおいてあらゆる局面で用いられる。この表現は素直に受け取れば素晴らしいと思う。

しかしその一方で、村ごとに団結するあまり、他村との対抗意識が強まり、島全体のまとまりがとれない状況がよくみられるのである。その要因を考えたとき、人頭税時代にまでさかのぼるのではないかと思う。

村の人口で割り当てられた人頭税を完納するためには、村全体が団結する必要がある。不具者や妊婦なども納税しなければならず、未納者が増えることは王府にとっても都合の悪いことである。そこで村ごとに連帯責任を負わせ、村ごとに競争させ、村と村の対抗意識を高揚させる方法をとったのであろう。村ごとに競争、団結をさせることによって、行政府の政策は思惑通りに進められ、農民の不満を相手の村に向けさせるために「肝一チ・色一チ」の政策を推進したと推察するのである。

これは「農民は生かさず殺さず」というような役人の施策であり、そうやって年貢を確実に納入さ

せようとしたのである。そのために村を互いに競争させ、対立を助長させたのであろう。村人は役人に頭が上がらないといった事情もあったにちがいない。だから、各村のなかで用いられる「肝一チ・色一チ」は、黒島全体の団結協調・発展を今日もなお遅らせている要因であると思われる。島の諸行事も村対抗で競争させ、村ごとに団結させることによって、村人は役人に従順となり、行政は穏便に治めることができたというわけであろう。

現代社会においては、心を合わせることや団結することは素晴らしいことである。しかし、「肝一チ・色一チ」といいながら、なかなか島全体が一つになることが難しいのは、このような背景が考えられるのではないだろうか。「肝一チ・色一チ」の言葉が、島の発展の阻害とはいわないまでも、黒島の政治、経済、産業に大きな影響を与えているのではないだろうか。

歴史を振り返ると、不思議に思うことがいくつか浮かんでくる。①1760年代に人口が1,500余人もいたこと、②鳩間島、伊原間、真栄里、野底などへ強制移住させられても、人口があまり減らないこと、③明朗爽快でユーモアあふれる島民性であるからだろうか、情緒豊かな古謡、芸能が豊富であること、④鮫に助けられた夢のような話など、多くの民話・伝説が語りつがれていることなど、次々に思い浮かぶのである。

近現代の人口動態を大雑把にみても、島の盛衰を知る手掛かりがつかめる。明治時代は700～800人前後、大正時代は900人前後、昭和初期時代は1,200人前後の人が島で暮らしていた。昭和50年代からは、児童生徒について過疎化対策を考えなければならない状況が続いている。過疎化の波は、学校の存亡、伝統文化の継承、伝統的行事の存続など、深刻な課題であり、あらゆる分野に影響している。

一方、琉球王朝時代に移入された牛も、1944年（昭和19）ごろ1,600頭もつなぎ飼いで増えたにもかかわらず、軍命でほとんどの家畜が徴用されてしまったが、その壊滅状態から現在は3,000頭にまで増え、現在は畜産の島として全国に認められている。のんびり草を食む牛の姿は、現在の黒島を象徴する風景にもなっている。畜産（牛）業が島全体で経営され、将来に希望を抱き、若い人のUターンを促し、現在島は活気づいている。牧畜に対する関心も高まり飼育の改良にも熱心である。そして毎年2月の第4日曜日は、ハートアイランドの「牛祭り」と銘打ったイベントが若者を中心に開催され定着し、頼もしいかぎりである。

生活が安定すれば定住と集落・学校の存続も確保され、かつてのように諸行事が復活され、何百年前から継承されている伝統民俗芸能の集団（団体）芸能も復活する可能性もある。そのとき、「肝一チ・色一チ」は、村々に固執せず、黒島全体としての認識をもって、明るい展望を見いだしていきたいものである。

1 黒島の歴史

伝承によると、アーザト（東里）村が黒島に最初に誕生した村である。アーザト村の繁栄と共に、山崎村、パイフタ村の二村に分村し、その後、ンギスト村、仲本村、イーバラ村、サキバル村、ナンザト村などが創立されるようになった。それから、アロースク村、サーバル村、フナト村、ナンザ村、崎原村を称して東筋村と称するようになった。往古、黒島村の一部に津波があった。津波前にあった部落は七つで山崎村、パイフタ村、ンギスト村、ナカシトゥ村、イーバラ村、サキバル村、ナカントゥ村があったが、そのうち海に近く津波の災害を被ったのはンギスト村で、村の後難を恐れた仲本家の祖先が現在の仲本部落の場所へ移転させたので、他の7部落も全部合併し、以って、仲本家の屋号を

用いて仲本村と称するようになったという。

1737年（乾隆2）の記録では、黒島村は宮里、仲本、保慶村の3部落で、人口が458人、東筋村人口は275人、保里村人口は315人とある。その後、1753年（同18）の人口調査から6カ村部落を一円として黒島村と改称し、人口1,417人を算する大きな村となる（喜舎場永珣『八重山民俗誌』〈上巻〉沖縄タイムス社、1977年、6～7頁参照）。

また、黒島は造船発祥の地と伝えられるが（「遺老説伝」にも収録）、1678年（康熙17）に造船所は木材の確保が容易な西表島の古見や石垣島に移される。黒島は開拓や廃村復興、時には人口増によって、黒島内の限られた耕地面積では重い人頭税を納めるには困難であったことから移されたのかもしれない。

島にはマラリアを媒介するマダラ蚊が生育しにくかったのも人口増の一因とされる。「野底マーペー」伝説やそれをうたった《ちんだら節》などは、当時の強制移住の悲劇を物語り、八重山屈指の物語として今も多くの人々に愛唱されている。

1771年（乾隆36）には八重山地方を襲った「明和天津波」が発生する。黒島においても南東にあった集落がほとんど流され、それは後の村の統廃合において集落形成に大きな影響があったことだろう。

1893年（明治26）には、現在のビジターセンター（ウイヌ屋跡地）があるところに、大川尋常小学校黒島分教場が創立する。1944（昭和19）～1945年（同20）の黒島校は防空壕や単独壕掘りをしたものの、校舎、運動場は爆弾などで全壊状態となった。軍の命令で家畜（牛）も没収されたが、戦後各家で牛や豚が養育され、現在は全国に「牛の島」として知られ、人口200人の暮らしを、牛3,000頭が支えているともいえるだろう。

次の年表は、『石垣市史叢書13 八重山島年来記』（石垣市、1999年）、『球陽 読み下し編』（沖縄文化史料集成5）（角川書店、1995年）を中心に手元にある数種の年表から、黒島の歴史に参考となる項目をピックアップして作成したものである。事項の末尾に『八重山島年来記』には〔年〕、『球陽』には〔球〕の記号を付したが、その他の事項については改めて確認を願いたい。

西暦(年頃)	事 項
1200～1500	・山上貝塚、スク時代、新里村期。
	・ミントウハネマ遺跡、スク時代、新里村期。
	・宮里村北西遺跡郡、スク時代、新里村期。
	・ナンザト遺跡、スク時代、新里村期。
	・サキバル遺跡、スク時代、新里村期。
	・フズマリ遺跡、スク時代、新里村期。
1400～1500	・保里遺跡、スク時代、新里村期。
1400～1600	・ウヴスク遺跡、新里村期、中森期。
	・フカスク遺跡、新里村期、中森期。
	・クスリチ遺跡、新里村期、中森期。

年 (年号)	事 項
1390 (明德元)	・ 察度王時代、宮古、八重山が琉球国に初めて入貢した。〔年〕〔球〕
1429 (宣徳4)	・ 中山の尚巴志、南山を討って琉球王国を統一する。
1477 (成化13)	・ 朝鮮国濟州島の漁民が与那国島に漂着する。その後、西表島、新城島、黒島、宮古島、沖縄島、九州を経て帰国し、見聞記を記す。
1486 (成化22)	・ 毛国瑞、八重山のイリキアマリを祭ることを厳禁する。
1500 (弘治13)	・ オヤケアカハチ事件が起こる。オヤケアカハチは王府軍に敗れ死亡。〔年〕 ・ 久米島の君南風、官軍に随って八重山に赴き奇謀を為す。〔球〕 ・ 初めて八重山に大阿母、並びに永良比金を置く。〔球〕 ・ 初めて八重山に頭職を置く。〔球〕
1524 (嘉靖3)	・ 八重山の西塘に初めて武富大首里大屋子を授ける。〔球〕 ・ 武富邑に西塘、八重山に公倉を創建する。〔球〕
1602 (万暦30)	・ 八重山に疱瘡がはやり、人民が数多く死亡。〔年〕
1609 (万暦37)	・ 薩摩藩の琉球侵攻。与論島以北は琉球から分離され、薩摩藩の直轄地と沖縄以南を薩摩藩支配下の琉球王国とする。〔年〕
1619 (万暦47)	・ 宮古、八重山に績織の房を創建す。〔球〕
1628 (崇禎元)	・ 八重山を大浜、石垣、宮良の三間切に分け、それぞれに頭職を置く。〔年〕
1632 (崇禎5)	・ 八重山に在番を置く。〔年〕
1636 (崇禎9)	・ 手札改めの始まり (人口調査)。〔年〕
1637 (崇禎10)	・ 人頭税施行。 ・ この年の冬から翌年の春まで、八重山で疱瘡が流行した。〔年〕
1639 (崇禎12)	・ 波照間島に南蛮人が漂着し、八重山の一幼女を掠奪して去る。〔年〕〔球〕
1641 (崇禎14)	・ 八重山に大和番所を置く。薩摩藩の役人が大和在番として駐在する。初代大和在番は竹内備前。〔年〕
1642 (崇禎15)	・ 大浜親雲上安師は大城与人の時 (1630年)、慶良間島に流罪となったが、この年赦免となり、木綿花の栽培技術を習得し島中に広める。〔年〕
1667 (康熙6)	・ 八重山に大地震があり、島中の所々が崩れた。〔年〕
1678 (康熙17)	・ これまで大船は黒島村で造っていたが、材木を積み渡り往来が大変なので、石垣船は石垣村で古見船は大枝村で造るよう定められた。〔年〕

1692 (康熙31)	・黒島・保里の二ヶ村の百姓は1,083人おり、その中から平得村へ220人の寄百姓を申請し、地頭持ちの村となる。〔年〕
1694 (康熙33)	・西表首里大屋子・小浜与人の乗り船が唐へ漂着し、このときサツマイモの種子を唐から八重山へ持ち帰り栽培。〔年〕
1696 (康熙35)	・蔵元の瓦ぶき申請許可。桃林寺、仮屋3ヶ所に井戸を掘る。井戸はそれ以来、次第に掘り井戸が用いられるようになった。〔年〕
1700 (康熙39)	・保里村から鳩間村へ60人の寄百姓が行われた。〔年〕
1703 (康熙42)	・鳩間村は黒島村、保里村から150人の寄百姓より、地頭持ちの村に昇格。〔年〕
1705 (康熙44)	・「八重山由来記」編纂、その記録は1713年『琉球国由来記』に収められる。
1706 (康熙45)	・手札改め、八重山の人口は、9,879人。〔年〕
1708 (康熙47)	・八重山では当年冬より翌年夏まで湿疹流行。〔年〕
1709 (康熙48)	・大飢饉により3,199人が餓死。
1711 (康熙50)	・保里村の地頭を仲間村の地頭にした。黒島村から平久保村へ167人の寄百姓が行われた。〔年〕
1714 (康熙53)	・11月12日、黒島村迎里に津波。屋敷囲いなど打ち破り、2歳になる子ども1人が溺死。〔年〕
1720 (康熙59)	・八重山酋長自ら米、粟を献じ冊封の費を補う。
1721 (康熙60)	・手札改め、八重山人口14,298人であった。〔年〕
1722 (康熙61)	・八重山島中飢饉、アダンを食べて命をつなぐ。特産物の上納をやめて、その夫役に替わり米で上納することになった。〔年〕
1723 (雍正元)	・村々に若文子を1人ずつ配置。〔年〕
1725 (雍正3)	・八重山中で虫害発生した。〔年〕
1729 (雍正7)	・手札改め、八重山の人口17,051人であった。〔年〕
1730 (雍正8)	・宮古、八重山島の船隻、改めて馬艦と為す。〔球〕
1731 (雍正9)	・黒島村の貯蔵を造り、瓦葺きにする。〔年〕

1732 (雍正10)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島村から400人、新城村から25人を野底野に分移し、野底村を新立する。『球陽』には「黒島の民人、往来には舟を用ひ、田を耕し地を動き、以て労苦を為す。是れに由りて、在番官、酋長呈請して、彼の島民人四百余名を分けて、此に移居せしむ」とある。〔球〕 ・桃里村は石垣、登野城、平得、大浜、宮良、白保、黒島から男女560人を移して村建てした。〔年〕
1736 (乾隆元)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山中の諸人所有田地の調査を行った。
1737 (乾隆2)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島村は合計1,048人。内黒島村男女458人、東筋村は男女275人、保里村は男女315人。そのなかで黒島村は石垣から4厘12町ほど離れていて村役人がいる。
1738 (乾隆3)	<ul style="list-style-type: none"> ・百姓が貫家を造ることを禁止し、堀立家にするよう命ずる。
1741 (乾隆6)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島・竹富・新城・波照間・鳩間・小浜の柚山は古見と西表の山の内から分割する。6ヶ村に柚山筆者2人ずつ初めて配置。〔年〕
1743 (乾隆8)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山中の上納田地を実際に検地し、まとめた帳簿を調べた。〔年〕
1745 (乾隆10)	<ul style="list-style-type: none"> ・手札改めを実施。これより若文子の勤役が始まる。〔年〕
1751 (乾隆16)	<ul style="list-style-type: none"> ・尚敬王が3月に死去し、尚穆王が即位した。〔年〕
1753 (乾隆18)	<ul style="list-style-type: none"> ・手札改めがあった。宮古と八重山の頭以下の者に系図家譜を仕立てることが許された。〔年〕
1755 (乾隆20)	<ul style="list-style-type: none"> ・疱瘡が発生し、西表首里大屋子ら10人余りが死亡。〔年〕
1761 (乾隆26)	<ul style="list-style-type: none"> ・手札改めがあった。〔年〕
1768 (乾隆33)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島の人口1,550人にのぼったため、名蔵村へ200人、上原村150人、桴海村へ50人を寄百姓。
1769 (乾隆34)	<ul style="list-style-type: none"> ・『球陽』に「九月五日、八重山黒島村に沛雨殷雷あり。本村農民加禰、出でて西加禰原に耕す。此の日大いに雨ふり、雷、其の原に落ちて、加禰、雷に焼かれて死す」とある。〔球〕
1771 (乾隆36)	<ul style="list-style-type: none"> ・明和の大津波が発生、八重山で9,313人死亡し、男女19,678人が生き残った。黒島村は男484人、女711人、合計1,175人いたが大津波により男95人、女193人合計288人が溺死した。男女902人が生き残り、その内より男64人、女103人合計167人を伊原間村に寄百姓が行われた。残った男325人、女410人合計735人で元のとおり村を再建した。その他、106町6反6畝20歩は作物に被害が出た。 ・八重山中に赤蠅発生す。〔球〕
1776 (乾隆41)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山は申年に大飢饉があり、人民がかなり餓死し、さらに疫病が流行した。

1777 (乾隆42)	・八重山は酉年に大飢饉があり人民がかなり餓死し、さらに疫病が流行した。
1799 (嘉慶4)	・山於那比、琉球国王より嘉賞。『球陽』に「八重山黒島村の故山加利の妻於那比に、黄八巻位の妻と一同の称呼を准し、並びに綿子二把を賜ふ」とある。〔球〕
1826 (道光6)	・『球陽』に「八重山黒島平得仁屋の善行を褒嘉して爵位を賜ふ」とある。〔球〕
1835 (道光15)	・黒島村の西原美屋久が、善行で嘉賞。〔球〕
1843 (道光23)	・多良間（仲本）真牛が鯨に助けられる。『球陽』に「正月二十五日、八重山黒島村の仲本、洋に在りて船を覆へし、偶々一木に扶して海嶼無人の処に飄到し、全く神庇に頼り、鯖に乗りて帰り来る」とある。
1845 (道光25)	・真牛、尚育王の謁見、並びに賞品を下賜される。〔球〕
1854 (咸豊4)	・黒島に製塩法が伝わる。中頭郡泡瀬の仲間武戸が来島し、島の北海岸のカキマバタで島人に製塩法を伝えた（『黒島誌』）。
1856 (咸豊6)	・『球陽』に「八重山黒島村の本原仁屋を褒嘉して爵位を賞賜す」とある。〔球〕
1868 (同治7)	・明治維新が起きる。
1871 (同治10)	・廃藩置県が行われた。琉球は鹿児島県の管轄となる。
1879 (明治12)	・琉球処分により、琉球王国は沖縄県となる。大和人4人、琉球人1人合計5人が黒島村の6反帆船で竹富村を出航。
1880 (明治13)	・蔵元内に八重山島役所を置く。
1882 (明治15)	・糸満漁民、初めて八重山に移住。
1883 (明治16)	・八重山警察署、島役所内に併置。
1889 (明治22)	・家屋制限令が撤廃。
1993 (明治26)	・大川尋常小学校黒島分校が設置。
1894 (明治27)	・日清戦争が勃発。 ・諸見里秀思が《黒島口説》に舞踊振り付け。
1896 (明治29)	・八重山に郡制を施行。 ・男子生徒11名の散髪を決行、黒島村において散髪の始とする。
1897 (明治30)	・蔵元、村番所が廃止され、八重山に郡制を施行。 ・八重山－台湾海底電信が開通。八重山通信所設置（公衆電話の始まり）。

1900 (明治33)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山裁判所が開所。 ・大川尋常小学校長の一色隆三が依願退職。
1902 (明治35)	<ul style="list-style-type: none"> ・干ばつの被害が深刻化し、農作物の大方が枯死。 ・土地整理事業が終結される。 ・「地租条例及び国税徴収法」が公布（12月25日）。 ・宮古、八重山で徴兵検査を開始。 ・海軍駆逐艦東雲号、宮古の八重干瀬で遭難。
1903 (明治36)	<ul style="list-style-type: none"> ・「地租条例及び国税徴収法」が施行される。人頭税廃止。 ・大川尋常小学校黒島文教場が創立。
1904 (明治37)	<ul style="list-style-type: none"> ・ネズミにより農作物に甚大な被害を受ける。 ・日露戦争が開戦。
1905 (明治38)	<ul style="list-style-type: none"> ・宮古島の5人の漁夫が、バルチック艦隊の通過を石垣島の電信局へ通報。 ・八重山カツオ業が開始。 ・八重山は戸数4,051世帯、人口19,866人。 ・日露戦役凱旋祝賀会、児童一同国旗行列。
1906 (明治39)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山は戸数4,051世帯、人口17,688人。 ・大川尋常小学校分教場は独立となり、黒島尋常小学校と改称。新城分教場は当校の所属となる。
1907 (明治40)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島尋常小学校新城分教場、本校独立校となった。 ・「沖縄県及び島嶼町村制」発布され、翌年4月1日に施行した。間切は村に、村は字に改称され、八重村が誕生し、間切制度は廃止（特別町村制）。 ・八重山織物組合が設立。 ・沖縄教育会八重山支部が設立。
1908 (明治41)	<ul style="list-style-type: none"> ・島嶼町村制施行され、八重山村がスタートを切る。初代村長には上江洲由恭氏が就任。 ・義務教育年限6カ年に延長される。
1909 (明治42)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山村の分村問題起こる。 ・上原村が廃村となる。
1911 (明治44)	<ul style="list-style-type: none"> ・社会教育、区民啓発、向学心鼓舞のため、黒島、新城島、小浜島各所にて幻灯会を開催。
1912 (大正元)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島漁業組合が設立される。
1913 (大正2)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山区裁判所が廃止。 ・航海の難所である黒島口（竹富島東沖）を開削。
1914 (大正3)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山図書館が開館。 ・八重山村は石垣、大浜、竹富、与那国の4カ村に分村。八重山村は分村して竹富村に改名し、村長には豊川善佐氏を任命され、役場所在地は竹富島とする（1914年（大正3）4月1日～1916年（同5）2月27日）。 ・八重山各村役場の位置決まる。 ・陸軍記念日につき記念講演会が開催される。 ・八重山でデング熱が大流行し、多数の児童が欠席。

1915 (大正4)	<ul style="list-style-type: none"> ・東筋集落内に西線の大正道路が開通。
1916 (大正5)	<ul style="list-style-type: none"> ・東筋集落内に東線の七福道路を開通、交通の利便を図る。 ・竹富、黒島、小浜、新城、波照間、鳩間、西表に行政区を設け、区長制度を実施。 ・癩患者収容所設置問題で八重山郡民大会が開催される。設置反対を決議する。 ・紀元節拝賀式を挙行。 ・第2代村長・安仁屋賢托が就任(1916年〈大正5〉2月29日～1920年〈同9〉3月17日)。 ・黒島青年団が比江地御嶽の外周から石垣を築いて神域を定める(『黒島誌』80頁)。
1917 (大正6)	<ul style="list-style-type: none"> ・マラリア撲滅期成会が設立。 ・『先島新聞』創刊。
1918 (大正7)	<ul style="list-style-type: none"> ・マラリア撲滅期成会が結成。 ・八重山で最低気温5.9℃を観測。石垣島で霜が降りる。
1919 (大正8)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山でコレラが流行。 ・ウリミバエが八重山諸島に発生。
1920 (大正9)	<ul style="list-style-type: none"> ・「府県制特例及び沖縄及び島嶼町村制」(特別町村制)を撤廃して「普通町村制」を施行。 ・竹富村役場の庁舎落成、並びに自治行政施行記念式典が開催される。 ・南風見村が廃村。 ・第3、4代村長に上間廣起が就任(1920年〈大正9〉8月18日～1928年〈昭和3〉8月23日)。
1921 (大正10)	<ul style="list-style-type: none"> ・柳田國男が民俗研究のために八重山に来島。 ・黒島、新城、小浜、鳩間、波照間の5カ所に竹富村立実業補習学校設立。
1922 (大正11)	<ul style="list-style-type: none"> ・宮里集落にある学校を島の中央に移転。 ・新築中の黒島校舎工事竣工落成式、宮里より移転。 ・八重山水産会設立。 ・八重山農業会を設立。
1923 (大正12)	<ul style="list-style-type: none"> ・折口信夫が民俗研究のため八重山に来島。 ・伊古棧橋に物置台を築造。
1924 (大正13)	<ul style="list-style-type: none"> ・ソテツ地獄が始まり、昭和初期まで続く。 ・黒島で初の発動機船一隻購入。
1925 (大正14)	<ul style="list-style-type: none"> ・大暴風雨が襲来し(最大風速50m/s)、農作物の8割が被害を受ける。 ・石垣島に村役場出張所を設置。 ・八重山にコレラが発生。 ・黒島尋常小学校高等科併置認可される。 ・黒島で初めて荷馬車一台を購入。
1926 (大正15 昭和元年)	<ul style="list-style-type: none"> ・火の神を宮里部落より学校へ移す。 ・暴風が襲来し、甚大な被害を受ける。 ・宮古八重山にマラリア防遏圧所を設置。 ・行政制度が改正され、八重山島庁を八重山支庁と改称。

1927 (昭和2)	<ul style="list-style-type: none"> ・竹富村が飢饉に陥り住民生活は困窮に極む。 ・八重山電灯会を設立。
1928 (昭和3)	<ul style="list-style-type: none"> ・第5、6代村長に次呂久英松が就任(1928年〈昭和3〉8月24日～1936年〈同11〉9月25日)。
1929 (昭和4)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山に干ばつが発生(2～4月)。 ・東筋共同製糖工場を設置。
1930 (昭和5)	<ul style="list-style-type: none"> ・旧式の牛車式三製糖工場を統合。 ・黒島校高等科男子22人が、貧民救済を行った。 ・竹富村忠魂碑除幕式が催される。
1931 (昭和6)	<ul style="list-style-type: none"> ・乾震堂の神体を島の中央に移す(黒島校の東側)。
1932 (昭和7)	<ul style="list-style-type: none"> ・『八重山日報』創刊。
1933 (昭和8)	<ul style="list-style-type: none"> ・石垣島に台風襲来(9月17日)。最大風速50.3m/s。 ・仲本製糖組合が仲本製糖工場を設置。 ・保里村に製糖工場を設置。
1934 (昭和9)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島校新築校舎落成式挙行。 ・八重山郡徴兵検査が始まる。 ・養老会を結成、初代会長に諸見里秀昌が就任。
1935 (昭和10)	<ul style="list-style-type: none"> ・『海南時報』創刊。 ・伊古棧橋、延長400m幅員4mの突堤工事が完了。
1936 (昭和11)	<ul style="list-style-type: none"> ・皆既日食。 ・第7代村長に安里武信が就任(1936年〈昭和11〉9月26日～1938年〈同13〉3月10日)。
1937 (昭和12)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島郵便取扱所設置。 ・竹富村軍人後援会結成。
1938 (昭和13)	<ul style="list-style-type: none"> ・竹富村役場を竹富島から石垣町字登野城へ移転。 ・第8代村長に柴田米三が就任(1938年〈昭和13〉3月31日～1938年〈同13〉3月31日)。 ・第9代村長に山田武三が就任(1938年〈昭和13〉7月14日～1943年〈同18〉1月9日)。
1939 (昭和14)	<ul style="list-style-type: none"> ・保証責任黒島信用販売利用組合を設立・登記(平良区裁判所八重山出張所)。 ・八重山地域干ばつ。
1940 (昭和15)	<ul style="list-style-type: none"> ・天皇皇后陛下御真影奉戴す。 ・大日本国防婦人会八重山支部の発会式が催される。
1941 (昭和16)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島尋常小学校を黒島国民学校と改称。 ・大政翼賛会八重山支部の発会式が催される。 ・アジア・太平洋戦争が勃発。

1942 (昭和17)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 県立八重山中学校が設立。 ・ 県立八重山高等女学校が設立。 ・ 独立混成第45旅団（宮崎武之少将）来島配備。
1943 (昭和18)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第10代村長に玉盛惇博が就任（1943年〈昭和18〉3月～1945年〈同20〉9月）。
1944 (昭和19)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 米軍艦載機による八重山初空襲（10月12日）。
1945 (昭和20)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒島に米軍機12機編隊、学校を中心に機銃掃射、並びに爆弾投下。 ・ 米軍機による黒島空襲。住民は西表島東部カサ崎を中心に、由布島、古見へ強制疎開させられる。 ・ 大舛久雄八重山支庁長、空襲により支庁官舎で爆死。 ・ 八重山群島所在の全部隊の甲号戦備下令。 ・ 御真影奉還。 ・ 6月23日、日本軍沖繩守備隊が壊滅し日本軍の組織的抵抗終わる（牛島司令官ら摩文仁で自決）。 ・ 8月15日、日本国がポツダム宣言を受諾。 ・ 県内外より島出身者が帰還し、人口が1,584人に膨れ上がった。 ・ 日本軍、嘉手納で降伏文書に署名（9月2日）。 ・ 米軍政府、布令「地方行政緊急措置法」を発令（9月13日）。 ・ 10月6日、米軍が八重山に進駐。 ・ 第11代村長に幾乃伸が就任（1945年〈昭和20〉年9月～1946年〈同21〉5月）。 ・ 竹富町役場を竹富島から石垣島（現八重山郵便局南側）に移す。
1946 (昭和21)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 八重山支庁開庁式が催される。 ・ 旧校舎落成、入学式（35名）。 ・ 黒島及び登野城に天然痘が発生。 ・ 第1次、第2次通貨交換（旧日本円からB円へ）。 ・ 黒島国民学校を黒島初等学校に改称。 ・ 第12代村長に大山真整が就任（1946年〈昭和21〉5月21日～1948年〈同23〉3月25日）。
1947 (昭和22)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 八重山高校が開校。 ・ 八重山支庁が八重山民政府へ改組。 ・ 竹富島、黒島からの移住者により由布島に部落創設。 ・ 黒島校建築中の校舎落成。 ・ B円を再度、法廷通過に指定。 ・ 八重山でマラリア防遏事業を開始。 ・ 黒島実業高等学校入学式。 ・ 黒島漁業会を設立。 ・ 黒島酒島外移出禁止。

1948 (昭和23)	<ul style="list-style-type: none"> ・第3次通貨交換時実施（新日本円からB円に）。 ・竹富村が竹富町へ昇格。 ・初代町長に山城（旧姓与那国）善三が就任（1948年〈昭和23〉3月26日～1950年〈同25〉9月25日）。 ・台風パールが襲来し、住宅崩壊や船舶沈没などの被害が続出。 ・黒島老人会が石垣町、大浜町の農業と諸事業を見学。 ・黒島製材所を開設。 ・伊古部落と東筋部落の一部浸水、暴雨風（パール）で4校舎崩壊。
1949 (昭和24)	<ul style="list-style-type: none"> ・学制改革による6・3制実施。 ・黒島小学校と改称。 ・黒島校40万円補助金で3教室の落成式を挙行。 ・黒島区長選挙を実施。
1950 (昭和25)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山復興博覧会を開催。 ・八重山群島知事選挙、安里積千代が当選。 ・第2、3代町長に仲本信幸が就任（1950年〈昭和25〉9月26日～1956年〈同31年〉2月19日）。 ・毒亀事件が発生。中毒者17～18名、犠牲者7名。 ・朝鮮戦争の勃発。 ・黒島の食糧危機に軍がメリケン粉放出。
1951 (昭和26)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島幼稚園の開園式を挙行。 ・黒島栈橋が竣工。
1952 (昭和27)	<ul style="list-style-type: none"> ・米国政府の出先機関「米国民政府」のもとに「琉球政府」を創設する。群島政府の廃止。 ・初代行政主席に比嘉秀平が就任。 ・八重山への政府系各移民の入植開始。 ・黒島駐在所の落成式挙行。 ・黒島で13年ぶりに敬老会開催。 ・竹富島、黒島、小浜の離島無線電信が認可。
1953 (昭和28)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島校創立60周年記念式典を挙行。 ・キット台風襲来、野菜などの甚大な被害を受ける。 ・仲本養蚕組合が雅蚕共同蚕室改善を八重山地方庁に陳情。 ・校歌制定（伊波南哲、外間永律）。 ・八重山地区祖国復帰促進期成会設立。
1954 (昭和29)	<ul style="list-style-type: none"> ・八重山計画移民第一陣が移住地の西表へ出発。 ・黒島で牛の重量競技部会を開催。 ・黒島校ブラスバンドが音楽の夕べを開催。
1955 (昭和30)	<ul style="list-style-type: none"> ・1955年度各種共進会褒賞状授与挙行、黒糖の部で黒島、堆肥の部で仲本が1等、貯蓄増強の部は竹富町で二等、出資増強で竹富信協が1等に輝く。

<p>1956 (昭和31)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 当間重剛が11月11日、第2代行政主席に就任（1959年〈昭和34〉まで）。 ・ 第4代町長に与那国修が就任（1956年〈昭和31〉4月6日～1960年〈同35〉4月5日）。 ・ 石垣在黒島郷友会を結成。会長に玻座真長和、副会長に仲盛富太郎、幹事長に山田昇選出。 ・ 黒島部落会、常会で歳暮の全廃を決議。 ・ 台風ダイアナで農作物も甚大な被害を受ける。
<p>1957 (昭和32)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒島校校舎落成祝賀会を開催。 ・ ムーア民生副長官を初代琉球列島高等弁務官に任命。 ・ トゥバラーマ大会を開催。 ・ 八重山婦人連合会を結成。 ・ 黒島で住民総動員による造林作業を実施、海岸線にモクマオ1,800本、ヤラブ20町歩新植とモクマオ2,250本、相思樹6,000本補植。 ・ 黒島小中学校の校舎A型ブロック2階建て6教室。 ・ 黒島青年会（70名）、竹富町青年連合協議会の大会（波照間島会場）、陸上競技、弁論に参加し、弁論部会で1位獲得。 ・ 通貨B円からドルへ切り替え、1ドル120円。 ・ 黒島公民館が運営審議委員会を開き、新生活運動の推進を討議。 ・ 台風ウィニーが襲来。 ・ 八重山婦人連合会を結成。 ・ 黒島西部の新設牧場実施調査。
<p>1958 (昭和33)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 震度5の大地震が来襲し、甚大な被害を受ける。
<p>1959 (昭和34)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大田政作が、11月11日に第三代行政主席に就任（1964年〈昭和39〉まで）。 ・ 黒島一石垣島間の定期航路船、黒潮丸が進水。 ・ 東筋部落会の共進会開催、甘藷、肥育牛、繁殖牛、肥育豚などを審査。 ・ 台風ビリーが襲来、最大風速32.8m/s、瞬間最大風速41.7m/s。黒島は甚大な被害を受ける。 ・ その他、ジョーン台風、サラ台風、シャーロット台風、エマ台風、フリダ台風など6個の台風で甚大な被害を受ける。
<p>1960 (昭和35)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ パン給食を開始（2月15日）。 ・ 西表島開発に関する日米共同声明。 ・ 黒島校給水タンク工事の着工。 ・ 沖縄本島在黒島郷友会の創立。 ・ 琉球政府八重山病院を開院。 ・ 黒島漁業組合、定期総会を開き解散を決議。 ・ 台風シャーリー襲来、最大風速43.6m/s、最大瞬間風速60.0m/s。

<p>1961 (昭和36)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ キャラウエイ陸軍中將が第三代高等弁務官に就任し、以後日本・沖縄隔離政策を推進。 ・ 黒島なかはら幼稚園、設置許可。 ・ ペティ台風、パメラ台風、サリー台風、ティルタ台風の四つの台風が襲来。 ・ 黒島郵便局の新庁舎が完成。 ・ 黒島製糖 KK の建設を期し島民大会を開催。
<p>1962 (昭和37)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 竹富町役場コンクリート庁舎落成（字大川10番地）。 ・ 高等弁務官がマラリア根絶を宣言。 ・ 黒島公民館が畜産共進会表彰式を挙行。 ・ 台風ケイト、台風オパール、台風エミールが襲来。
<p>1963 (昭和38)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒島の今期の製糖操業終了、5月に終了祝賀会。 ・ 生産者の表彰式が開催される。 ・ 台風7号、8号、石垣島測候所創立以来の記録的な長期的干ばつ解消。 ・ 大原より救援飲料水が届く。 ・ 大浜中学校生徒会より飲料水（3合ビン1,550本）届く。 ・ 黒島を舞台に日本テレビ「水と風」のロケ班。 ・ 関東黒島郷友会（当時はそてつの集い）。
<p>1964 (昭和39)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第1回与那国町、竹富町親善交歓大会が与那国町で開催。 ・ 黒島校、テニス優勝（中体連優勝杯）。 ・ キャラウエイ高等弁務官更迭、後任にワトソン陸軍中將が就任。 ・ 松岡政保が10月31日、第四代行政主席に就任（1968年〈昭和43〉11月30日まで）。 ・ 第7代町長に白保生男が就任（1964年〈昭和39〉9月14日～1968年〈同43〉9月13日）。 ・ 台風ベティ接近、台風ドリスが接近。 ・ 石垣在黒島郷友会、黒島古典舞踊発表会を丸映館で9月21日～22日に開催。収益金は以後60年間にわたり郷友会の資金源となる。
<p>1965 (昭和40)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 第2回与那国町、竹富町親善交流交歓大会が竹富島で開催。 ・ イリオモテヤマネコの頭骨が発見される。 ・ 黒島校、テニス優勝、（2連勝）祝賀会開催。 ・ 黒島、子ども郵便局の開局式。 ・ 石垣空港滑走路が竣工。 ・ 先島テレビ局設置第1次調査団一行が来島。 ・ 台風ハリエット襲来、台風メアリ来襲、甚大な被害を受ける。 ・ 竹富島、黒島、小浜島郵便局無線電話が開通。 ・ 八重山民政官府長ウイルソン中佐、黒島を巡視。
<p>1966 (昭和41)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ アンガー陸軍中將が5代高等弁務官。 ・ 黒島で玉葱の収穫を開始。 ・ 黒島校、子ども郵便局、賞状、賞品を受ける。 ・ 日本大学医学部歯科診療班来島、西表西部、黒島、竹富島で無料診察。 ・ 地震発生、西表島で震度4を観測。 ・ 台風ジュディ襲来、漁船など流失被害を受ける。 ・ 台風コラ襲来、最大瞬間風速44.9m/s、農作物に甚大な被害を受ける。

<p>1967 (昭和42)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回役場移動開設並びに産業共進会、大原で開催。 ・八重山電信電話局ダイヤル児童電話が開通。 ・八重山気象台が黒島に無線ロボット風向風速観測所を設置。 ・八重山気象台、史上2番目の暑さ34.6度を観測。 ・第2回全琉郵便局長会議で郵便貯金奨励優良局に西表、黒島、大原、波照間の各郵便局が表彰。 ・石垣在黒島郷友会、第1回親睦大運動会を開催。 ・台風ギルタが襲来。 ・八重山テレビ局施設譲渡式、開局記念式典を挙げる。
<p>1968 (昭和43)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島校、中体連主催卓球女子チームが優勝。 ・アンガー高等弁務官が「芋、はだし論」の演説。 ・初の公選主席に屋良朝苗氏が当選。第5代行政主席（1968年〈昭和43〉～1972年〈同47〉5月14日）。 ・第8、9、10代町長に瀬戸弘が就任（1968年〈昭和43〉9月14日～1978年〈同53〉9月13日）。 ・鹿児島島大学医学部、九州大学医学部熱帯医学研究会、順天堂医学部熱帯医学研究会の3団体が黒島、波照間島に無料検診を実施。 ・台風ウェンディ襲来。 ・黒島公民館主催、産業共進会及び褒賞式挙げる。 ・八重山電報電話局が竹富島、黒島、小浜島、鳩間島の電話交換業務開始。 ・東筋公民館、新館落成式挙げる。 ・黒島老人クラブ結成大会、会長に又吉智福を選出。
<p>1969 (昭和44)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・鹿児島大学医学部診療団が、黒島で無料検診を行う。 ・台風ペティが襲来。 ・小型の迷走の台風フロッキーが襲来。 ・黒島公民館主催、第7回畜産共進会が開催される。 ・黒島に農山漁村電気導入法による電機事業施設が完成。 ・台風11号（エルシー）警報発令のため休校。 ・第6代高等弁務官にランバート陸軍少将が就任。 ・屋良主席本校を訪問し、島内を視察する。
<p>1970 (昭和45)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島校の学校図書館が落成。図書室、音楽室、校長室も充当。 ・竹富町が、町歌、町紋章を制定。 ・竹富町老人クラブ連合会を結成。 ・八重山地方庁は八重山支庁に改称。 ・黒島の電気施設が完成、点灯祝賀会を挙げる。 ・今冬最低の気温9.5度を記録。 ・台風オルガが接近。 ・南方同胞援護会会長・大浜信泉先生一行が来校。 ・電気施設が完成、点灯祝賀会が開催される。

<p>1971 (昭和46)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 一日移動役場の開設。 ・ 長期干ばつは83年ぶり。農作物は枯死。議会で非常事態宣言決議。 ・ 「黒島へ草を送る運動」による草の第1陣到着、牛の命つなぐ。 ・ 大型台風ベスが襲来。家屋全壊826戸、半壊507戸。台風襲来で臨時休校。 ・ 4・28復帰デーの特設授業。 ・ 八重山支庁、黒島周辺海域に立標3本が設置。 ・ 台風ナディンが襲来し、黒島の栈橋を決壊する。 ・ 米国民政府が水脈探しのポーリング調査を実施。
<p>1972 (昭和47)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本復帰、再び沖縄県になる。 ・ 黒島の町営電気事業、琉球電力公社へ移管。 ・ 竹富町の電気事業（6カ所）、沖縄電力へ譲渡。 ・ 日本復帰記念に南洋杉を植樹。 ・ 竹富区教育委員会を竹富町教育委員会に改称。 ・ 日本政府よりホバークラフトが譲渡される。 ・ 竹富町役所を町役場と改称。 ・ 日本政府が交歓レートを1ドル305円と閣議決定。 ・ 琉球政府閉庁式。 ・ 復帰協が5.15県民大会。 ・ 通貨ドルから円へ交歓開始。 ・ 石垣の基地でホバークラフト就航式挙行。後に離島間に就航。 ・ 迷走台風7号、ジグザグ、停滞、Uターンで吹き荒れる。 ・ 台風14号襲来。 ・ 第4回フライングドクター総合巡回診療、黒島で実施。 ・ 黒島の豊年祭が戦後15年ぶりに開催される。 ・ 県厚生部、黒島、小浜で眼科診療実施。 ・ 本土復帰を控え土地買占めが表面化、地価高騰。 ・ 干ばつ続きで黒島、鳩間島に船で飲料水を運搬。
<p>1973 (昭和48)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒島案内の碑完成、除幕式を挙行。 ・ 西表島から黒島・新城への海底送水の起工式を挙行。
<p>1974 (昭和49)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 八重山の牛の吸血ダニの駆除、黒島を皮切りに実施される。 ・ (財)海中公園センター八重山研究所、黒島で起工式を挙行。
<p>1975 (昭和50)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 西表島から黒島、新城島への海底水道通水式を挙行。黒島小中学校で盛大に竣工式典、及び序幕式を挙行。 ・ 沖縄海洋博覧会が開催される。
<p>1976 (昭和51)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 黒島で空中散布による牧野ダニの駆除を実施。 ・ 台風13号が襲来し、甚大な被害を受け、災害救助法が適用される。
<p>1977 (昭和52)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 大型台風5号襲来、最大風速53.0m/s、最大瞬間風速70.2m/s。甚大な被害を受ける。 ・ 黒島小中学校体育館が完成、落成式典・祝賀会を盛大に挙行。 ・ 黒島診療所が完成、落成式典及び祝賀会を挙行。

1978 (昭和53)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島中学校が八重山中体連、男子テニス団体で優勝。 ・黒島中学校創立30周年、黒島小学校創立85周年記念式典を盛大に開催。記念誌を発行。
1979 (昭和54)	<ul style="list-style-type: none"> ・竹富南航路、黒島口の浚渫工事に着手。 ・B737-200型のジェット機が就航。
1980 (昭和55)	<ul style="list-style-type: none"> ・第11、12、13、14代町長に友利哲雄が就任（1980年〈昭和55〉9月14日～1996年〈平成8〉9月14日）。 ・台風12号が襲来し、農作物に甚大な被害を受ける。
1981 (昭和56)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島セリ市場施設が完成。第1回畜産セリ市場が実施される。 ・黒島小学校創立88周年記念式典並びに新校舎落成祝賀会が開催。 ・竹富町立黒島保育所が閉所。以後、公民館運営で対応。 ・竹富南航路・黒島口の浚渫工事が完了。 ・黒島ゲートボールコートが完成。コート開きを挙げる。
1982 (昭和57)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島中学校、中体連新人総合体育大会、テニスで団体優勝。 ・中体連体育大会でテニス優勝、女子団体優勝。 ・中体連陸上競技大会に参加。島仲さゆりが走高跳びで優勝。 ・台風11号が襲来し、本町に災害救助法が適用される。 ・黒島中学校、テニスランキング、準優勝。 ・第2回畜産共進会、黒島で開催される。 ・石垣在黒島郷友会がふるさと芸能大会を開催。20年間途絶えていた島の結願祭を再現。
1983 (昭和58)	<ul style="list-style-type: none"> ・中体連新人総合大会、テニス女子が団体優勝。 ・黒島ビジターセンター開所式。 ・黒島ヘリコプター離着陸施設が完成。 ・黒島ビジターセンター運営協議会を設立。会長に友利哲雄町長。 ・竹富町・与那国町電話番号簡素化工事が完了、八重山郡内市外局番を統一。 ・石垣在黒島郷友会の呼びかけで黒島公民館、沖縄、関東郷友会など、多数の方々から寄附金をいただき、2隻の新パリーイ舟を建造。舟屋や、黒島の豊年祭でパリーイを3年ぶりに復活させた。 ・パリーイ舟2艘新造（期成会長・玻座真武）を、黒島公民館（館長・島仲三郎）に贈呈。
1984 (昭和59)	<ul style="list-style-type: none"> ・竹富町農村婦人の家の建設起工式。黒島東筋で挙げる。 ・中体連体育大会テニス新人戦団体女子優勝。個人ダブルス男子準優勝。 ・黒島小中学校生徒が1年がかりで日時計を完成。除幕式を挙げる。 ・黒島保育所が再開所。
1985 (昭和60)	<ul style="list-style-type: none"> ・関西黒島郷友会が発足（当時の名称は大阪黒島郷友会）。 ・黒島で町政懇談会が開催される。 ・竹富町農村婦人の家の完成落成式、及び祝賀会を挙げる。 ・黒島で2年ぶり豊年祭を挙げる。

1986 (昭和61)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島東筋－黒島校線が日本の道100選に選定される。
1987 (昭和62)	<ul style="list-style-type: none"> ・竹富町スポーツ少年球技大会リーグテニス、男子の部で黒島中学校が優勝。 ・第6回畜産共進会、黒島で開催される。 ・第1回ばいぬ島まつりを開催。
1988 (昭和63)	<ul style="list-style-type: none"> ・中体連夏季大会参加、バドミントンダブルスで優勝。シングルスは準優勝。 ・非核平和のまち宣言。
1989 (昭和64/ 平成元)	<ul style="list-style-type: none"> ・牛体ダニ、黒島でゼロ根絶。 ・交通安全の町を宣言。 ・黒島畜産セリ市に電子自動セリ機を導入。 ・黒島の牛の像を建立、除幕式を挙げる。
1990 (平成2)	<ul style="list-style-type: none"> ・竹富町立黒島保育所の落成式典、及び完工祝賀会を開催。 ・黒島にある南神山御嶽の拝殿改築落成、落慶祝いを挙げる。 ・台風15号が襲来、農作物に甚大な被害を受ける。 ・黒島和牛改良組合の結成。 ・石垣在黒島郷友会創立35周年記念式典、並びに祝賀会が開催される。
1991 (平成3)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島芸能館起工式を挙げる。 ・迎里御嶽の拝殿の落慶祝賀会を挙げる。 ・県道黒島港線に道路照明施設が完成し点灯。 ・石垣在黒島郷友会保里支会40周年記念式典を挙げる。 ・台風19号が襲来。サトウキビに甚大な被害を受ける。 ・黒島芸能館完成落成式典、並びに祝賀会を開催。 ・第1回町駅伝競走競技大会を開催。黒島が優勝。 ・黒島の「白い道路と町並み」が建設省の手づくり郷土賞に選定される。
1993 (平成5)	<ul style="list-style-type: none"> ・第1回ハート愛ランドフェスティバル黒島を開催。 ・黒島小学校百周年記念式典を挙げる。『百周年記念誌』を発行。 ・公社営畜産基地建設事業・竹富町第1区草地造成及び牛舎等建設工事の起工式、黒島で挙げる。
1994 (平成6)	<ul style="list-style-type: none"> ・台風13号、与那国で最大瞬間風速70.2m/sを記録。竹富町でも甚大な被害を受ける。 ・「旧盆台風」の台風16号が襲来。 ・黒島郵便局の新局舎が完成、落成祝賀会を開催。 ・台風29号八重山全域で猛威を振るう。祖納で最大瞬間風速64.9m/sを記録。
1995 (平成7)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島畜産セリ市100回記念セレモニーを開催。 ・黒島の客船ターミナル、供用を開始。 ・石垣在黒島郷友会創立40周年記念「黒島の伝統芸能祭」を石垣市民会館大ホールで開催。 ・人工衛星ノナのデータ受信システムが黒島海中公園センター内に完成、祝賀会を挙げる。

1996 (平成8)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島に生活改善グループ「相思樹」を発足。 ・台風9号が八重山全域で猛威を振るう。 ・第15代町長に西島本進が就任（1996年〈平成8〉9月14日～2000年〈同12〉9月13日）。 ・八重山舞踊勤王流記念碑が黒島で完成。 ・黒島畜産市場集会センターが完成。
1998 (平成10)	<ul style="list-style-type: none"> ・町営住宅黒島団地が東筋に完成。 ・公社営畜産基地建設事業「竹富第一地区事業引渡し式」を黒島で挙げる。
1999 (平成11)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島中学校創立50周年記念式典を開催（記念誌『心』発行）。
2000 (平成12)	<ul style="list-style-type: none"> ・第16代町長に那根元が就任（2000年〈平成12〉9月14日～2004年〈同16〉9月13日）。
2001 (平成13)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島の家畜セリ市で「竹富町産牛の牛海綿状脳症安全宣言」を行う。
2004 (平成16)	<ul style="list-style-type: none"> ・第17代町長に大盛武が就任（2004年〈平成16〉9月14日～2008年〈同20〉9月13日）。 ・琉球放送 RBC、ラジオ沖縄の民放が放送開始。
2005 (平成17)	<ul style="list-style-type: none"> ・石垣在黒島郷友会創立50周年記念式典、並びに祝賀会を挙げる。 ・黒島校体育館が完成。 ・黒島の伊古棧橋、竹富の西棧橋が登録有形文化財に登録。
2006 (平成18)	<ul style="list-style-type: none"> ・台風13号の襲来により甚大な被害を受ける。上原で最大瞬間風速68.9m/sを観測。 ・黒島港浮き棧橋の供用を開始。 ・黒島に小型焼却炉が完成。 ・竹富町立黒島診療所に常住医師が配置される。
2007 (平成19)	<ul style="list-style-type: none"> ・石垣島ドリーム観光、営業運航を開始。
2008 (平成20)	<ul style="list-style-type: none"> ・第18代町長に川満栄長が就任（2008年〈平成20〉9月14日 2016年〈同28〉9月13日）。 ・これまでのパーリー舟に感謝し、新パーリー舟の進水式を挙げる。
2009 (平成21)	<ul style="list-style-type: none"> ・琉球朝日放送(QAB)の放映開始。
2011 (平成23)	<ul style="list-style-type: none"> ・「牛まつり」、毎年2月第4日曜日に開催。 ・東北3県、大津波で甚大な被害を受け、原子力発電所の事故で被害が拡大。
2012 (平成24)	<ul style="list-style-type: none"> ・新校舎落成記念式典を挙げる。 ・黒島高齢者・ゆくい処「ウイヌ家」を開設。
2013 (平成25)	<ul style="list-style-type: none"> ・黒島小学校創立120周年記念式典、並びに祝賀会を挙げる。 ・記念誌『黒潮の子』発行。
2015 (平成27)	<ul style="list-style-type: none"> ・石垣在黒島郷友会創立60周年記念式典並びに祝賀会を挙げる。

2 『北木山風水記』にみる黒島

八重山の異称「北木山」を冠した史料に「北木山風水記」がある。幸いに『石垣市史叢書16』（2008年）として石垣市史編集課により翻刻・翻訳されている。これによると、「北木山風水記」を簡単にいうと、王府時代の「八重山の風水、特に村落風水についての報告書」である。

ここから、黒島の村落（27宮里村、28桴喜村、29仲本村、30保里村）について、読み下し文と翻訳の部分を引用することにする。

宮里村

一、番所、^{ばんじょ} 艮^{うしとら}に坐して、^{ひつじさる} 坤^{だいもんあ}に向かう。大門在りて坤^この方に開く。是れ生氣^{せいき}の門と為す。尤も吉^{もつと}なり。

（番所は、^{うしとら} 艮^{ひつじさる}（北東）の方位を背にして、^{ひつじさる} 坤^{ひつじさる}（南西）の方位に向かう。大門があつて ^{ひつじさる} 坤^{ひつじさる}の方位に開いている。これは生氣の門である。もつとも吉である。）

一、小門、^{しょうもん} 乾^{いぬい}の方に在り。是れ天医^{てんい}の門と為す。又た吉^まなり。

（小門は、乾^{いぬい}（北西）の方位にある。これは天医の門である。また吉である。）

一、前の厠、^{かわや} 午^{うま}の方に在り。禍害^あの方と為す。尤も吉^{もつとも}なり。

（前方の厠は、午^{うま}（南）の方位にある。禍害の方位である。もつとも吉である）

一、後ろの厠、^{かわや} 壬^{みずのえ}の方に在り。五鬼^あの方と為す。又た吉^{ごき}なり。

（後ろの厠は、壬^{みずのえ}（北北西）の方位にある。五鬼の方位である。また吉である）

一、竈、^{かまど} 戌^{いぬ}の方に在り。天医^あの方と為す。又た吉^{てんい}なり。

（竈は、戌^{いぬ}（西北西）の方位にある。天医の方位である。また吉である）

一、天井、^{てんせい} 方正^{ほうせい}なり。尤も吉^{もつと}なり。

（天井（中庭力）は、正方形である。もつとも吉である）

一、村前の直路・横路は、^{ちやくろ} 宜^{おうろ}しく^{よろ} 図^てに照らし、以て改め聞^{あたら}くべし。乃ち吉^{すなわ}なり。

（村の前の真っ直ぐな路と横路は、ぜひとも図を参照して、それに従って改め、道を開くべきである。そうすれば吉である）

一、村の後ろ、^{はんきゆう} 反弓^{おろ}の形に似たり。恐らくは居民^{きよみん}、長寿^{ちやうじゆ}すること能^{あた}わざらん。宜^{よろ}しく^て 図^{あたら}に照らし、以て道路^まを聞き、又た多く^{じゆもく} 樹木^うを栽え、以て補佐^{ほさ}すべし。乃ち吉^{すなわ}なり。

（村の後ろは、弓が反った形に似ている。恐らく住んで居る人は長寿を全うすることができないであろうから、ぜひとも図を参照して、それに従って道路を開き、また多く樹木を栽え、それによって補うべきである。そうすれば吉である。）

一、地下に水有るか水無きかを知らんと要せば、^{よう} 宜^{よろ}しく^{てんせいせいめい} 天清^お星^{いく}明^{ほん}の夜^{しみず}に干いて、幾つかの盆^たに清水^おを貯めて、地上に安^{せいこう}きて^み 天上^その星^こ光^ほを看^{さげ}るべし。其の星最も大にして明なる此の地を掘り下れば必ず水有り。

（地下に水があるかないかを知る必要がある時には、空が清く澄んだ星の明るい夜に、幾つかの盆に清水を貯めて、地上に置いて、それに映る天上の星の光を看るべきである。その星が最も大きく明るい所の地を掘り下げれば必ずや水があるであろう）

桴喜村 坐長向坤

(艮に坐して坤に向かう。艮〈北東〉の方位を背にして坤〈南西〉の方位に向かう)

- 一、本村、東方に悪石有り。吉ならず。除去すれば、尤も吉なり。又た樹を栽えて、柵を築き、以て避くるも妨げず。

(本村〈桴喜村〉は、東方に悪石がある。それは吉ではないので、除去すれば、もっとも吉である。また木を栽えて垣を築き、それによって避けても障りはない)

- 一、其の前の道路、宜しく図に照らし、改め開き、以て番所の道路と相連なるべし。尤も吉なり。

(村の前の道路は、ぜひとも図を参照して改め、道を開き、番所の道路とつながるようにすべきである。そうすれば、もっとも吉である)

- 一、其の村、樹木甚だ少なくして抱護の佐けなし。宜しく図に照らし、多く樹木を栽(う)え、以て其の気を護るべし。乃ち吉なり。

(この村〈桴喜村〉は、樹木がたいへん少なく村を抱護する佐けがない。ぜひとも図を参照して、多く樹木を栽えて、それによって気を護るべきである。そうすれば吉である)

仲本村 坐長向坤

(艮に坐して坤に向かう。艮〈北東〉の方位を背にして坤〈南西〉の方位に向かう)

- 一、本村前の道、宜しく旧に因りて番所の道と相連なるべし。乃ち吉なり。

(本村〈仲本村〉の前の道は、ぜひとも元のように番所の道とつながるようにすべきである。そうすれば吉である)

- 一、工の字の道に当たる者は、必ず両家傷み分けの妨げ有り。本村、〇〇屋、此の妨げを犯す。図に照らし、以て改むれば、即ち妨げず。

(工の字形の道に当たる家は、必ず両家に傷み分けの障りがある。本村〈仲本村〉では、〇〇屋がこの障りがある。図を参照して、それに従って改め、道を開くべきである。そうすれば吉である)

- 一、後道、背去の形有り。吉ならず。宜しく図に照らし、以て改め開くべし。乃ち吉なり。

(後ろの道は、背き去るような形をしている。それは吉ではないので、ぜひとも図を参照して、それに従って改め、道を開くべきである。そうすれば吉である)

- 一、本村、抱護の佐けなし。吉ならず。宜しく図に照らし、多く樹木を栽え、以て其の気を護るべし。乃ち吉なり。

(本村〈仲本村〉は、抱護の佐けがない。それは吉ではないので、ぜひとも図を参照して、多く樹木を栽え、それによって気を護るべきである。そうすれば吉である)

保里村 坐長向坤

(艮に坐して坤に向かう。艮〈北東〉の方位を背にして坤〈南西〉の方位に向かう)

- 一、本村、左側の地勢高くして気は下り去る。宜しく旧に因りて道を開き、以て其の気を護るべし。乃ち吉なり。

(本村〈保里村〉は、左側の地勢が高いので気は下に去ってしまう。ぜひとも元のように道を開き、そのようにして気を護るべきである。そうすれば吉である)

- 一、後道、直去して情なし。吉ならず。宜しく図に照らし、曲折し、又た其の側に樹木を栽え、以

て其の氣を護るべし。乃ち吉なり。

(後ろの道は、真っ直ぐに延びていて、情がない。それは吉ではないので、ぜひとも図を参照して、折れ曲がるようにし、またその側に樹木を栽え、それによって氣を護るべきである。そうすれば吉である)

伊古村 坐艮向坤

(艮に坐して坤に向かう。艮(北東)の方位を背にして坤(南西)の方位に向かう)

一、本村右辺、宜しく図に照らし、多く樹木を栽え、以て其の氣を護るべし。乃ち吉なり。

(本村(伊古村)の右側は、ぜひとも図を参照して、多く樹木を栽え、それによって氣を護るべきである。そうすれば吉である)

東筋村 坐艮向坤

(艮に坐して坤に向かう。艮(北東)の方位を背にして坤(南西)の方位に向かう)

一、本村、丁の道に当たる者は、宜しく石敢当を立て、又た小塘を掘り、以て其の凶を避くべし。乃ち吉なり。

(本村(東筋村)で丁の道に当たる家は、ぜひとも石敢当を立て、また小塘(小さな溜池)を掘って、それによって凶を避けるべきである。そうすれば吉である)

一、工の字の路に当たる者は、必ず両家傷み分けの妨げ有り。本村、〇〇屋、〇〇屋、此の妨げを犯す。改むれば即ち妨げず。

(工の字形の路に当たる家は、必ず両家に傷み分けの障りがある。本村(東筋村)では、〇〇屋、〇〇屋は、この障りを犯しているが、改めなければ障りはない)

一、本村、宜しく図に照らし、多く樹木を栽え、以て其の氣を護るべし。乃ち吉なり。

(本村(東筋村)は、ぜひとも図を参照して、多く樹木を栽え、それによって氣を護るべきである。そうすれば吉である。)

3 地名

1 「黒島」

大雑把にいうと、「黒島」は「石の島」という意味である。喜舎場永珣は、「黒島の島名考」(『八重山民俗誌』(上巻)9~11頁)で具体的な考察をすすめている。また、「星島」説もある(『ばがー島 八重山の民話』収録の「黒島は星島」参照)。

2 井戸

黒島の地下水はすべて塩水であり、命の水は雨水に頼らなければならない。それゆえ各集落には地形の低い所や粘土質の所の地下水は塩分が少なく、干ばつときは生活用水として使った。共同のウリハー(下り井戸)が何カ所かにある。

(1) 保里村(西回り道路の入口、大井戸(ウプハー))

(2) 宮里村ニサー(方位北の意でウイ道の東側を水道が入るまでは地下水として使用)

- (3) 仲本村（大井戸〈ウブハー〉は、村の中央にあり、旧正月や健康願いの拝所となっている）
- (4) 東筋村（船道賢範氏宅南側や前船道家にある）
- (5) 伊古村（村の中央にある）
- (6) ティミズヌハー（おもとお嶽とパイフタお嶽の通りで、ヤマサキ村との関わりのある井戸）。

3 原

宮里村は保慶、兼久原、保里村はアダン原、島仲原、与那原、北兼久原、伊古村はサア原、東筋はハンタ原、仲本村は南風保多原、南風原、崎原、南野原、中野原、北野原などがある。

4 グスク（盛）

グスクは牧場開拓でその原型も大きく変わっている。

- (1) イヌムン（宮里村北方遺跡群）
- (2) ナンザト遺跡、東筋の東
- (3) サキバル遺跡、東筋の東
- (4) フズマリ（タカムイ）遺跡
- (5) ヴウスク遺跡、宮里の北
- (6) フカスク遺跡、仲本の東南東
- (7) ヴォスク遺跡、仲本東南東
- (8) アラスク遺跡、東筋

5 道

昔は各村を結ぶ道が中心となり、それから農作業への必要な野原道で道路は形成されていた。しかし、学校が宮里村から現在の位置に移り、五つの村から学校を結ぶ学校道路ができる。

主な道路は、保里—宮里間は「ウイ道」、宮里—仲本間は「ウブッター道」、東筋—伊古間は「イメー道」、伊古—保里間は「スム道」、保里—東筋間は「ナハ道」、東筋（シマナハ道）、仲本—東筋間は「パイクティ道」、東筋（キャン道）、東方、東北（ミズマハ道）、北東（マシリ道）、その他がある。

4 人口の推移について

1 人口推移

1651年（順治8）～1768年（乾隆33）の黒島の人口は1,500人前後で、このころも分村移住が行われているが、それは開発政策が主な目的であった。1771年（乾隆36）の明和・大津波後は、被害村の再建のために、道切りなどの無慈悲な方法で他島へ強制移住を命じられた悲劇の島であった。女が石と化したというヌスクマーペーの哀話など、そのために生まれた伝説である。

黒島には風土病がなく、人口がよく繁栄したことによるものであったと考えられる。島の土地は狭小の割りに人口が増えるあまり、食糧生産のアンバランスを招き、ひそかに他島へ通耕するといった悩みもあったと伝えられている。

黒島島民の強制移住について、大まかなものを拾ってみると、1703年（康熙42）は鳩間島へ150人、

1731年（雍正9）は野底村へ400人、1771年（乾隆36）は伊原間村へ167人、真栄里村へ293人、1857年（咸豊7）は名蔵村へ200人、桴海村へ50人、西表島上原村へ150人などの記録がある。

1975年（昭和50）以降は、人口が300人台を割っており、現在210～220人前後に落ち着いている。

2 黒島から移住を命じられた集落

(1) 野底村

喜舎場永珣『八重山民俗誌』（上巻）17～18頁には、次のようにある。

黒島村は珊瑚礁の島嶼であるために土地は痩せ、其の上人口は一千三百余人繁栄し、土地面積の割合に人口は過剰であった。従って生活難と闘いつつ人頭税の過酷に堪え兼ね、其の打開策として黒島役人の黙許を得て、裏石垣島の肥沃な広野を開拓して、以って生き伸びんとし、二〇哩の海上を遠しとせず往還して農耕する者共もあった。又一方には各離島の知人を便りに出稼ぎに行くやらで、其の窮状は言語に絶する程であった。茲に於て島の役人は村民と協議の結果、一七三一年（享保一六年）蔵元政庁と打ち合わせ、其の打開策として黒島の人口四百人を彼等の現に開拓しつつある野底へ移住すべく計画案を樹立し、首里王府へ陳情書を提出したのである。其の翌享保一七年の九月二五日附を以って認可指令が到着したので、直ちに計画通り宮里村から分村して野底村の新村を創建し、以って与人一人、目差一人を配置して独立村としたのであった。

一九〇五年（明治三八年）一〇月五日、県令第三八号を以って廃村となり、其の土地は伊原間村へ編入されたのであるが、実際には東盛ナビヒガシモリという女傑が一人死守していたが、一九三四年（昭和九年）六七歳を一期として死亡したので名実共に廃村となった次第である。

昭和九年を廃村と見たならば、野底村は二百四年間の長き星霜をマラリアと人頭税の二大敵と闘いつつ、科学的衛生設備の皆無を怨みつつ遂に敗北して、今や大本山麓に於て一大悲劇史を物語りつつある。「ちんだら節」と称する悲哀の詩は、分村当時の恋愛を引きさかれ、やるせない情熱を吐露した歌である。

(2) 伊原間村

平久保役人の支配下にあつて人口僅か168人の小部落であつたが、登野城村、石垣村から強制移住を命じて316人として、与人、目差の役人を置いて独立村とした。その後、人口も730人なるまで繁栄したが、明和大津波によって625人が溺死したので黒島から167人を強制移住させ生き残り95人と合わせて262人で村落を再建した。しかし、これもまた悪性マラリアに叩かれ、第2次世界大戦後には廃村の一手手前という状態であつた。その後、マラリアは撲滅し、宮古島や沖縄本島などからの移住により今日の伊原間村が形成されている。

喜舎場永珣は明和大津波後の強制移住について、「東筋アガリスジ部落の西方、即ち又吉智福氏の東方の縦道路からと及び北方の一部からであつた。当時の世持（ユムチィ）職を勤めていた前仲宇津真利氏の宅まで移住区域内にあつたが、前仲世持役の辣腕と機智のために役人も断行しきれず、止むなく移住区域を世持役の後方からすることに變更して断行した」（『八重山民俗誌』（上巻）18頁）と記している。そして、前仲世持はその災難を免れたとのことである。

また、伊原間には、現在黒島の屋号である上野屋、上里屋、野底家の姓や家のパン（印）が残つて

おり、移住の面影が偲ばれる。

(3) 鳩間島

苗字や特に言葉は、よく類似していて親密感もたれる。保里部落は、黒島において漁業の盛んな部落であり、琉球王府の意図は向かいの上原浦内に水田を開拓させ米の上納させることを意図していたのではなかろうか。1703年（康熙42）、黒島、保里2カ村から150人の強制移住、寄百姓があり、鳩間村は地頭持ちの村へ昇格した。

(4) 真栄里村

明和と津波後、真栄里村は「人口一千百七三人の内九百八人は溺死したので、蔵元政庁では部落復興計画を樹立され、人口繁栄地の黒島から男百三五人、女百七十八人、計三百一三人に強制移住を命じ、生存人口二百六五人と合せて人口五百七十八人となし、以って真栄里村を復興再建した」（『八重山民俗誌』〈上巻〉19頁）。

戦後1950年代までお年寄りたちの話す言葉が、黒島方言とそっくりで、アクセントに少々の変化を感じた。仲本部落からの移住であろうと推測される。真栄里部落の山田家と仲本部落の山田家は、親密な関係にある。

(5) 平久保村

1711年（康熙50）、黒島から167人、平久保村へ移す。

(6) 桃里村

石垣、登野城、平得、宮良、白保、黒島から男女560名を移して村建てした。

(7) 名蔵村、上原村、桴海村

「一八五七年（安政四年）、黒島村は人口一千五百五〇人繁栄し、ために耕地面積と人口との釣り合いがとれず、其の上珊瑚礁の瘦地で生産高が他地方に比較して少ないので、島民は常に生活の脅威をうけ、其の上人頭税の負担に苦しみ、其の義務を果し得ない者も少なくはなく、従って村行政上の支障が多かったため、黒島の役人は村の幹部と協議・計画をなし、八重山の行政官庁たる蔵元へ陳情したので、蔵元においても移民計画の具体案を樹立され、人口四百人程を上原・名蔵・桴海等に補充移民を断行すべく、首里王府へ申請書を提出し、直ちに認可されたのである」（喜舎場永珣『八重山民俗誌』〈上巻〉20頁）。そして、名蔵村へ200人、上原村150人、桴海村へ50人、計400人を寄百姓した。

5 検地と人頭税制度

人頭税制度は、薩摩の琉球征服（1609年（慶長14））後、1637年（崇禎10）に施行された。首里王府は米、及び雑穀の納額を各村の石高に割賦し、税率を定めて行った。本租の割合およそ四公六民に相当しているようである。

首里王府は宮古、八重山の人口を調査し、従来沖縄本島と同じく石高に割賦していた貢租を、人頭

に割付けて徴収することに改めた。大浜信賢氏著書『八重山の人頭税』によると、役人を除く15歳から50歳までの八重山住民に人頭税が課せられた。海産物、陸産物はもちろん、船材、建築用材切り出しのために、農民は1カ月の20日間服されたので、自分の田畑を耕す時間や、人頭税納付の準備をする時間がなかった。

水田のない黒島に米の上納を命じ、その村人に有病地なる西表島の水田を開かshめたことである。黒島田(現美原地区)がそれであり「多良間眞牛」事件もそのひとつである。黒島、竹富島、上地島、下地島などは水田がないにもかかわらず、米納を目的とし、有病地に強制移住させられて、生き地獄の展開となる。この人頭税は明治の廃藩置県になっても宮古、八重山の住民は1903年(明治36)まで266年間苛酷な人頭税の庄迫下に牛馬以上に酷使されたのである。

人頭税滞納者は、いわゆる犯罪人として理由の如何を問わず峻烈な拷問を加えられたようである。有病地への強制移住による悲劇は多く、また廃村も石垣島、西表島にマラリア病によって引き起こされたのである。黒島から真栄里へ1692年(康熙31)に220人を寄百姓、鳩間島へ1700年(同39)～1703年(同42)に210人の寄百姓を移住させた。村割りによる男女別離の悲劇は古今東西を問わず胸を締め付ける物語である。

6 社会教育

1 明治、大正期の教育

黒島で学校が創立したのは1893年(明治26)のことである。創立以前は会所といって、当時の士族の子弟の勉強所があって、平民は学問を禁止されていたようである。宮良勇吉(1912年生まれ)によると、当時の島の人々は、ほとんどが文盲であり、開校しても学校へはあまり関心がなかったようで、入学しても学校へは行かず友達同士で浜辺(学校は現在番所跡、浜はウブドゥマンのこと)で遊んだりしたので、村々では奨学係を設置して遊んでいる子供たちを追いまわして通学させていたとのことである。その頃の学科は読み方と算術、唱歌程度で、学期試験には本校大川尋常小学校の先生が試験官として学科試験を実施した。そして成績によって悪いものは落第生として進級できなかった。

小学生は宮里村にある学校で学び、一部の方は高等科のある石垣島の大川、登野城校へ進学した。その後、教育の普及により、学校も現在の仲原地区に設置された。高等科の進学も増え、女性も進学するようになり、婦人団体や青年会も活動が活発に展開した。

明治時代は、産業革命期から殖産、富国強兵、教育勅語、労働者問題など、新しい政府の政策が大きく変わり、外国に肩を並べるために日清戦争を境に、産業革命が急速に進行していくなかで、青年会活動も大きく変遷していく。

帝国主義は日清戦争から産業革命、日露戦争へと、国民も労働者の暮らしも、天皇を中心とした教育に移行していった。教育勅語をもとにして軍国主義が台頭し、日露、日華事変を通じて、国民の戦争感情は高ぶっていった。そして、ロシア革命、アジアの民族運動、米騒動、労働者・農民運動、さらに世界恐慌で経済は混乱し、日本は大陸へ進出するなかで、軍国主義が拡大していった。1939年(昭和14)、世界第二次大戦から、日米対立の太平洋戦争を経て、1945年(同20)8月6日広島に原爆投下、9日長崎の原爆投下、6月23日沖縄地上戦で全滅し、8月15日に日本国は降伏し終戦を迎える。

この間、国民は御国のためと、国家総動員法に結びつき、敵国に勝つまでは我慢と耐乏生活が求め

られた。国民総動員体制と大政翼賛会によって、国民は一人ひとりに戦争のためにあらゆる物資を献上させ、「贅沢は敵だ」をモットーに、日本の勝利を信じて1億人が生命財産を捧げたのである。当時の天皇を中心とした軍部の戦争責任は拭いきれない。黒島は人頭税時代から、「肝一チ、色一チ」の仕組みに慣らされているから、隣組制度はスムーズに進められたと思慮される。当時流行った歌《隣組》は、「トントントンカラリと隣組、格子を開ければ顔なじみ、廻して頂戴回覧板」とうたっている。このように全体共同体、全体責任を強調しながら、国民の落伍者をださないように、宣撫政策を推し奨め、陸海軍を中心に軍国主義がはびこり、隣国を侵略することも正当化されて展開していったのである。

2 戦後の社会教育の変容

敗戦で兵隊を退役した男たちが、県外や海外から引き揚げてきて、黒島の人口は一千余人に膨れ上がった。彼らは親戚を頼りに間借り生活などをして暮らした。同時に食糧不足をきたすなか、若者たちが荒れた農地をユイマールで各家庭の畑を朝作業でサポートする青年会が村々に組織されていく。まず青年会は民主主義教育に戸惑いながらも互いに学んだり、弁論会を開催したりした。また4つの村が合同でスポーツ大会を催し、余る体力を発散させるだけでなく、その後黒島のスポーツ全盛期につなげていく。彼らが中心となって、島興し、村興しが展開され、島の伝統行事や伝統芸能（特に豊年祭、結願祭）の復活、娯楽を含めて、戦後復興に尽力した。

このように戦後、各村は部落会長を頂点に青年会、婦人会等が組織され、行政の区長が置かれ、その他農業共進会、畜産共進会、製糖組合、生活改善グループ、4Hクラブなどの活動が活発に展開された。

ここでは戦後の公民館活動をはじめ、青年会、婦人会、4Hクラブ、学校のPTA、老人クラブの活動を大きく社会教育ととらえ、娯楽のことも含めて触れておきたい。

(1) 公民館活動

長年続いていた部落会は、各村を支会として島全体をまとめ、年中行事や諸事業を行っていたが、1955年（昭和30）ごろ黒島にも公民館組織が取り入れられ、区長も兼務する組織体制へと移行した。それでも、部落会にもあった宮里支会、仲本支会、東筋支会、保里支会、伊古支会といった組織体制はそのまま引き継がれている。現在東筋、仲本支会では旧正月の綱引きや結願祭を独自で開催している。

公民館は島内行事や行政の窓口となる中枢組織で、役員には、館長、副館長、書記、会計、広報部、環境部、文化部などがある。島行事はほとんど公民館主催となって開催される。

(2) 公民館活動

八重山研究の父と称される喜舎場永珣は、八重山に関する琉球王府時代の古文書や琉球処分以降のさまざまな歴史資料を収集した。1908年（明治41）の「学務書類綴」もその一つで、このなかには青年会活動に関するもの、学校創立に関するものを確認できる。

八重山郡の教育史において、島々で断髪騒動がみられるが、黒島初等学校の「沿革誌」では1901年（同34）4月11日の記事に「当文教場卒業児童ノ中二八、辞校後、社会ノ悪シキ風潮ニ化セラレ異様ノ風俗ヲナシタルモノ往々アルニ依リ召集訓諭ノ上、断髪ヲ決行ヲセシメタリ」、また1902（同35）

3月17日の記事に「時勢ノ進度ニ伴ヒ旧俗ノ結髪ハ陋習（ロウシュウ）ニ見エ、当地人民ハ本日ヲトシ五十歳以下ノ者七十余名断髪決行セリ」とある。

「黒島青年会沿革」によると、1908年（同41）3月15日の記事に、「本島ハ遠僻ノ離島ニテ、四ヶトノ交通不便ナル為カ、当地人ニハ、世情ニ疎クモ少カラズ、従来種々ノ陋習多ク、且ツ、ヤカテ村制施行セラルノ的機トモナルヲ以テ、本島在職員ノ発企ニ依リ、青年会設立ノ必要ヲ認め、本日午後一時ヨリ、村事務所内ニ創立總會ヲ開キ、予テ草案セシ規則ヲ議シ、次ニ役員選挙ヲ行ヘリ」とある（『竹富町史だより』〈第19号〉参照）。

当時の青年会規則は次のとおりである。

黒島青年会規則

第一条 本会ハ本島陋習ノ風俗改良ヲ計リ、青年ノ風紀ヲ善良ニ進メ、兼テ本島人民ノ利便ヲ計ルヲ以テ目的トス

第二条 本会ハ黒島青年会ト称ス

第三条 本会ハ本島在職員及本島人民ヲ以テ組織ス

第四条 本会ノ目的ニ賛成スルモノハ、本会ノ承認ヲ經テ会員タルコトヲ得

第五条 本会ノ事務所ハ黒島尋常小学校内ニ設置ス

第六条 本会ノ会議ヲ分ケテ評議員会及總會トシ、臨時的ニ開会ス

第七条 本会ニ左ノ役員ヲ置ク

一、会長一人

一、副会長一人

一、評議員八人

一、幹事五人

〈第八条、第九条省略〉

第十条 本会員ニシテ役員選挙権アルモノハ年齢二十五歳以上六十歳以下ノ男ニシテ、各戸内重ナルモノニ限り、同時ニ被選挙権モ有ス

〈第十一条、第十二条省略〉

第十三条 本会員ハ会費トシテ一戸ニ付キ、毎年金式錢ヲ四月中限り幹事ニ納ムベシ

〈第十四条省略〉

第十五条 本会則ハ明治四十一年三月十五日ヲ以テ之ヲ施行ス

時は、風習として士族平民の格差甚だしくて特に修学は士族の子弟のみに止まり、平民にはこれを禁止たるものなれば、明治維新後四民平等を唱えられ、士農工商の別なく何れも修学できる時勢になったが平民は教育不可能と堅く自らこれを信じ、平民には教育は普及しなかったが大川尋常小学校黒島分校で男子児童34名を集め普通教育の初歩を授けた。

1894年（明治27）には、大試験が実施され21名中18名及第。その後、父兄を勧誘し、全児童の断髪を実施した。当時は1割～2割が不登校の状況でした。50歳以下の断髪を強行され本島の子弟からも高等科や師範学校に進学する者も出てきた。本島出身の大底代用教員や登野城尋常小学校の高等科や手芸科入学するなど門戸がひらかれ女子の子弟も本島外にも視野が広がった。

1916年（大正5）、「黒島青年団が（比江地御嶽の）外周から石垣を築いて神減（ママ）を定めた」

(『黒島誌』80頁参照) という記事がみられる。

(2) 青年会活動の全盛時代

1960年代になると、社会状況もようやく落ちつき、島外に職を求める者も現われた。島内も製糖工場で黒砂糖を生産し、経済的にもある程度ゆとりがでてきた。製糖工場の拡張や畜産農家も増え、それに伴って島の将来について青年会では討論会を開催したりした。その時、中型製糖工場の誘致問題が起こり、学校の南側にポーリングが行われた。

その頃、竹富町青年会連合会が結成され、古見新整が会長に就任、黒島も全村を一つに連合会を結成するよう連絡があり、70余名の会員で黒島青年会連合会をつくり、会長に黒島校に勤務する玻座真武が就任した。当時は各島々を順番に開催することを決め、この年は波照間島開催で、黒島からは70余名が参加した。当日は陸上競技が各青年会対抗で行われ、夜は交流と弁論大会が行われ、黒島代表の石川博敏が最優秀賞に輝いた。当時の波照間定期船は現在のような快速艇でなく、小型の焼玉式木造船で波は荒く、船酔いする者が続出する思い出の大会となった。

黒島ではこれを境に(ポーリングの掘削で地下水は見込みなし)、若い青年たちが島外へ流出した。子弟への教育熱も盛んになり、石垣島や沖縄本島への移住児童生徒数が増加した。黒島校の生徒数は290余名から90名に激減し、過疎化は更に進んだ。

同時に青年会活動も休会状態に陥った。1970年(昭和45)を前後して、西表島からの水道大事業、祖国復帰、名鉄の黒島の土地買占め、リゾート進出の撤退などがあり、過疎化の波は止まることなく、児童生徒も10名前後で創立120周年(2013年)を迎えた。現在、黒島は畜産に活路を見出し青年たちもUターンして経済的にも豊かになり、青年会も復活し、島に活気が戻ってきた。また、壮年たちも島を支えている。

(3) 婦人会活動

1933年(昭和8)10月に発足した黒島婦人会組織活動は、生活改善・向上、婦人学級の開催などをはじめ、竹富町婦人連合会への参加といった団体との親睦など、農村社会の改善に大きく貢献した。

かつては婦女子に教育を受けさせてもらえず、他の島に比べても教育に対する自覚も低かったが、戦後を通して各村々で諸行事においての活動も盛んになったが、活動が記録された資料は乏しいといわざるをえない。幸いに、運道武三『黒島誌』108-109頁にわたって、「昭和48年度の活動」「昭和57年度の活動」「歴代会長」が記されており、当時の婦人会活動の一端を知ることができる。

ところで、戦後の1946年(同21)、画期的な婦人参政権が付与され、婦人の地位は法的に確立された。かつての国防婦人会のような婦人会でなく、各村に婦人会が出来た。そして、1957年(昭和32)に八重山連合会が結成され活動が始動し、ブロックごとに幹部講習会や研修で「新生活運動」やレクリエーションなどが社会教育の一環として実施された。

復帰前から「社会学級」と「家庭教育学級」が成人学級として実施され、現在は老人学級、青年学級、婦人学級、趣味の会など、多方面に展開されている。

(4) 4Hクラブ

黒島における4Hクラブは、町役場(教育委員会)の指導で4H、つまり頭脳(head)、手(hand)、心(heart)、健康(health)の頭文字で地域社会における交流、親睦や農業技術改良などを目的として作

られた組織で、各村の若い青年たちが講習を受けたり、他島の農業視察が行われたり、またサトウキビの改良研究や討論会が盛んに行われた。青年会活動と連動して農業、畜産に対する意識が高まった。

(5) P T A活動

戦後、学校教育が再開され、後援会もP T Aへ組織が変わり、父母は教師と手を取り合って校舎建築のための資材集めや仮校舎建設に精力的に活動した。当時の学校設置者である民政府や市町村でなくもっぱら教職員や父母の力に頼らざるを得ない状況だった。

このようなことから、当然に父母を中心にして組織された「学校後援会」は、学校施設整備の中心的役割として活動した。1947年（昭和22）には、各学校単位の後援会が連合して地区教育後援会、沖縄教育後援会連合会が設立された。1948年（同23）ごろになると世相もやや落ち着きをみせ、行政機構も整ってくるようになり、本土の新教育の一環としてP T A運動が沖縄でも提唱されるようになった。しかしながら学校後援会からの組織替えは、あまり進まなかった。行政側や沖縄教育後援会、沖縄教育連合会（沖縄教職員会の前身）の熱心な啓蒙運動が徐々に実を結び、1953年（昭和28）ごろには、ほとんどの学校がP T A組織に改められ、沖縄P T A連合会として再発足した。1970年（同45）ごろにはP T Aは、340余の団体、会員数も20万余人の大きな団体となっている。学校単位のP T A活動として学校環境整備、学校行事への参加協力、校外指導、P T A学級などを実施したり、沖縄連合会のP T A指導者研修会等、教育振興の側面からの推進に大きな役割を果たしている（『沖縄市町村30年史』参照）。

本校のP T A活動における主なもの

①円筒水タンク造り

会員にバラスを割り当て校舎の北側に三段の十連タンク造りで会長の小浜簾好氏は無報酬で完成するまで毎日学校へ来られたのが印象に残っている。

②各教育隣組対抗による童話大会

黒島は、童話、話し方、弁論大会が盛んになり、青年会活動へと広まった（指導者富村致祐、西表真雄）。

③教育模合で「四角八分ランプ」購入で学力向上をめざす

明るいランプで子供に勉強させようと（普通家庭では五分ランプ）資金作りに模合をした。

④修学旅行における協力

西表島、石垣島などの旅行地でご飯炊きを協力し、薪や大きな鍋を持参し、賄いはP T Aの親たちが担った。

⑤討論会「島の将来を考える」

水問題は島の最大の課題であり、P T Aとしても地下には雨水はあるのか真剣に討論がなされた。その後、学校の南側の畑でボーリングがなされた。

⑥ P T A 資金作り

アーサー採りと玉ネギ農場は、選手の派遣費用など P T A 事業部として学校や P T A 運営になくなくてはならない重要な存在だった。

⑦ レクリエーションと会員の親睦

活動が活発になると、会員の団結や親睦を図るため、レクリエーションとして漁を楽しみ、その獲物を肴に懇親会で親交を深めた。

⑧ 歴代 P T A 会長

初代	仲 底 英 敏	19代	松 竹 秀 文	37代	仲 嵩 善 治
2代	多良間 幹 雄	20代	船 道 賢 範	38代	小 倉 完 治
3代	知 念 政 儀	21代	新 城 英 勇	39代	玉代勢 泰 忠
4代	野 崎 高 弘	22代	島 仲 三 郎	40代	玉代勢 光 子
5代	竹 越 堅 一	23代	船 道 賢 範	41代	運 天 実
6代	小 浜 廉 好	24代	比屋定 義 正	42代	宮 良 哲 行
7代	津 田 当 均	25代	島 仲 三 郎	43代	小 倉 完 治
8代	金 城 弘	26代	島 仲 正 弘	44代	久 貝 秀 利
9代	島 仲 源 蔵	27代	幸 原 当 忠	45代	島 仲 恵 美
10代	宮 良 勇 吉	28代	宮 良 当 成	46代	大 底 京 子
11代	友 知 政 昌	29代	又 吉 智 永	47代	仲 盛 浩 吉
12代	保 里 源 吉	30代	仲 嵩 時 子	48代	宮 良 寿
13代	比 屋 定 弘	31代	宮 良 哲 行	49代	池 田 章 光
14代	神 山 忠 蔵	32代	又 吉 智 永	50代	佐 賀 小百合
15代	兼 城 昌 一	33代	西 表 邦 夫	51代	池 田 章 光
16代	竹 越 堅 一	34代	宮 良 道 子	52代	又 吉 清 真
17代	前 底 勇 栄	35代	島 仲 正 弘	53代	宮 喜 みゆき
18代	竹 越 堅 一	36代	宮 喜 正 廣	54代	宮 澤 哲 也

⑨ P T A 文化部、事業部の年間計画

- ・教育隣組活動の強化
- ・映写会（公民館と連携して実施）
- ・文化講座（年間2回実施）
- ・郷土芸能研究発表会（舞踊・民謡・ジラバ・ユンタ）
- ・会報発行

- ・給食用貯水タンク、雨どい架設
- ・PTA農場、玉ねぎ栽培、きび栽培
- ・教材園、飼育小屋の設置
- ・自転車置き場の設置
- ・PTA文化部が発足して満2カ年になり、活動も「無」から「有へと芽を出し」。
- ・学習するPTA、総ぐるみで会員全員が活動を示し、教育のために頑張った(会長・比屋定義正)。

(6) 伝統行事や娯楽など

黒島において、豊年祭、正月のユープキー（世引き、綱引き）、結願祭などの年中行事は、豊作、健康祈願と同時に、娯楽としての性格も備えていた。正月のユープキーに始まり、各行事で行なわれるユンタ、ジラバなどの歌謡も盛んだった。

とりわけ豊年祭行事は三日間にまたがって村、島がひとつになる祭事である。豊年祭は豊作に感謝し、来年の豊作を祈る「パーリィー競漕」、「弥靱・奉納舞踊」、「棒術」などが中心である。1日目は、各お嶽で豊作祝い、2日目は、宮里、仲本の豊年行事、3日目は、保里と東筋の豊年行事が開催される。1983年（昭和58）以降は、宮里のウブドマンにて4カ村合同で開催されている。

結願祭は2日間行われ、1日目は各村の結願行事がお嶽で、2日目は番所（現ビジターセンター）広場で4ヶ村総出で朝から集まり、奉納芸能が繰りひろげられた。踊りは各村の踊りの師匠の手によって指導がなされた。弥靱、初番、踊りをはじめ、各村で選ばれた劇（狂言）は涙あり、笑いあり、組踊が人気を呼んだ。観衆により一番よかったと評価された村は、次年度に向けて狂言を取り組むことになっていた。そのうちの宮里村の組踊は、知念政倍翁の指導の下、子の政昌が高く評価された。石垣在黒島郷友会は、これらの劇（狂言）を中心に、舞踊「黒島口説」や島の舞踊を、丸映館や興業ホールなどで公演し、その収益金が郷友会の運営資金として活用され、また約300世帯に貸し出しされ、会員の支えとなった。

その他、九月祝いの翌日は学校の運動会、16日祭の翌日は学芸会など、貧しい時代の暮らしの知恵がそうさせたのだろうか。伝統行事や学校行事各種が人々の心を癒した。戦後は島の人口も増え、部落会、青年会、婦人会も復活し、5部落対抗の運動会が盛んになり、いろいろなエピソード、珍プレーが語り草になっている。

八重山郡陸上大会や竹富町青年連合協議会主催島巡り陸上大会も盛りあがった。1958年（昭和33）大会は波照間島で開催されたが、黒島青年会連合会（会長・玻座真武）から70名余が参加した（青年会は当時25歳まで）。

島に娯楽施設は皆無であったが、石垣島や沖縄本島の芝居や劇団が、学校や各村の集会場を借りての巡業公演も行われた。これは唯一の娯楽といっても過言ではなく、いつも大入り満員であった。「奥間英五郎劇団」が1960年代後半に来島して公演したことは今でも記憶に残っている。

テレビが白黒テレビからカラーテレビへと変遷しながら、島での娯楽の様相も変わっていった。

7 信仰と祭祀

保里御嶽、迎里御嶽、南風保多御嶽、仲盛御嶽、南神山御嶽、北神山御嶽、喜屋武御嶽、桴海御嶽が、黒島における八御嶽で、別名「公事御嶽」と呼ばれ、すべて『琉球国由来記』にも記載されている。

る。その他、船浦御嶽、名石御嶽、美珍御嶽、比江地御嶽などがある。

1 宮里村の御嶽

(1) 保慶（浮海）御嶽（ふきわん）

保慶村の銘里家の祖先に信仰深い人がいた。常に村民に敬神崇祖の道を説いて村人を指導しておられたのである。ある日、彼はいつものように新城島の北方、俗に「ニシナーシキ」と称すサンゴ礁に行って網を立てて魚群の来るのを待っておられた。

ところが、魚が見えず不思議なことに高さ2尺位の石が海上へ浮いたまま来て網にかかったとある。彼はなにげなく捨てたのであるがその石がまたも浮いてきて今度は反対側から来て再び網にかかったので彼は不思議に思いこの石はただの石ではなく霊石である。神が私どもに授け給ったのであると感謝しこの霊石を舟へ載せてこの場所に安置して信仰したのである。

最初漁撈に行った三人の乗組員はともにこの霊石を信仰していたら、この年の農作物は驚くほど大豊作であった。三人をはじめ、村人はこの霊石を信仰したからだと思い、この霊石は農神であって私有すべきでないという村民協議の結果、御嶽を創建し、この零石を神体として深く尊信したのである。神司は銘里家が代々継がれていたが現在は島にはおられない（*知念政範著『黒島史』）。

その他、保慶御嶽について、次の資料がある。

- ・喜舎場永珣『八重山民俗誌』〈上巻〉16～17頁。
- ・牧野 清「浮海御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）323～324頁。
- ・運道武三『黒島誌』（1988年）77～78頁。
- ・通事孝作「御嶽めぐり 保慶御嶽」（『八重山日報』1987年10月3日付）

(2) 船浦（ふのらわん）御嶽

毎年、豊年祭行事が催されている宮里海岸（ウブドマン）のフズマリの東側に舟づくりがなされた。当時の上野屋は現在のビジターセンターの場所ではあさんが住んでおられた。舟大工は、仲本村の多良間家の人々でかまどの火を分け合ったり、休憩時にはお茶をもてなされたようである。舟の進水には海上平安を祈願して、この場所に御嶽の神石を安置し、航海を祈願するようになったといわれている。ティジリは多良間家の子孫が受け継がれ、神司は上野屋の関係する女性が司るようになり、私の祖母ウムツが長らく神司を務めた。その後は祖母の実家「豊屋（広沢家）」がしばらくなされ、戦前戦後は長男長貴嫁のナヒマが神司をなされたが、玻座真家は元字新川村の方であり、血縁の関係はなく、黒島47番地に移転しても屋号はそのまま今日まで上野屋（ういぬや）である。

昭和30年代まで當山哲男や兄の玻座真長栄は、御嶽改築に尽力された。「上野家」の先祖が當山家と関わりがあることがわかり、神司は當山家に引き継がれ今日にいたっている。（*元船浦御嶽神司・玻座真ナヒマの回想から）

その他、船浦御嶽について、次の資料がある。

- ・牧野 清「船浦御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）335～336頁。

(3) 名石御嶽

船浦御嶽はウブドマンの中央に位置し、名石御嶽は、東側にあり、鳥居は北側にある。資料が不十

分で由来はわからないが、信仰されておられた方は知ることが出来る。粟盛家、粟元家、平得屋など、宮里で「当」のつく名前の方が信仰されておられた（資料収集中）。

その他、名石御嶽について、次の資料がある。

- ・牧野清「仲石御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）338頁。

(4) 美珍（びじる）御嶽

昔、津久登武屋の人と松竹屋の人が夜漁（イザリ）に行き漁をしているうちに、黒光りしている丸いものが浮いて流れて来た。張網ですくって見ると黒い石で、漁師などは不思議に思い、これはただ事ではないと考えて家に持ち帰る途中、その石がその創立した現場に転び落ちた。そのままそこで信仰したというのが、宮里村と仲本村を結ぶ中間の北側に、南に向いた鳥居があった。信仰されておられた家は津久登武家（津田）や松竹家などで、その由来やその他資料が不明であり、宮里村に関係する方々は現在島におられない。

その他、美珍御嶽について、次の資料がある。

- ・牧野 清「ビジリ御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）333-334頁。

2 保里村の御嶽

(1) 保里御嶽

昔、大和の国からはるばると航海を続けた大和船が黒島の東崎（ヌナシキ）という海岸に着いた。船員は長い旅から開放された喜びでいち早く上陸しようとしたが、船の帆柱に無気味なヘビがからみついているのを一人の船員が見た。どういったヘビなのだろうと一同が騒ぎたてている時、一行の中の老人が「航海中にいなかったこのヘビの神秘をみて昔から神の化身であるこのヘビは我々の船を守護してくださった神であろう」といった。それで一行は丁寧このヘビを東崎の浜に帆柱より下ろしておいたがこのヘビはこの場所からいっこうに動こうとはしなかった。それでこの場所は我々の上陸する場所ではないと悟り船を出して島を一周させたところ保里村の「イミス浜」という所にさしかかったとき、このヘビは自ら船を下りて島に向かってはいだした。それで船の人々はこの場所こそヘビが示した霊地であると、御嶽を建立し尊信した。

その他、保里御嶽について、次の資料がある。

- ・喜舎場永珣『八重山民俗誌』（上巻）15～16頁。
- ・牧野 清「保里御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）325-326頁。
- ・通事孝作「御嶽めぐり 保里御嶽」（『八重山日報』1987年5月2日付）
- ・運道武三『黒島誌』（1988年）69-70頁。

(2) 伊見底御嶽

伊見底御嶽について、次の資料がある。

- ・牧野 清「伊見底御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）334頁。

3 仲本村の御嶽

(1) 迎里御嶽（ンギストゥワン）

明和の大津波で廃村になったと考えられる旧迎里村にある。由来は不明であるが、海岸に近いことから他の御嶽同様、航海安全を願った旅御嶽の可能性があると考えられる。各御嶽にはカミツカサがおり、そのツカサの中でも最も位の高いツカサを「ウブツカサ」と呼ぶ。「黒島八嶽」の中では迎里御嶽が長男であるとされ、迎里御嶽の「ウブツカサ」は島全体のウブツカサとなり、島全体での願いの行事や島全体の「結願祭」など、他の御嶽のウブツカサやカミツカサを取り仕切りながら行う。これに関しては、現在迎里御嶽のウブツカサは不在のため定かではない。

その他、迎里御嶽について、次の資料がある。

- ・牧野 清「迎里御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）321－322頁。
- ・運道武三『黒島誌』（1988年）70－71頁。
- ・通事孝作「御嶽めぐり 迎里御嶽」（『八重山日報』1987年7月4日付）

(2) 南風保多御嶽（パイフタワン）

仲本海岸近くにある御嶽。入口の鳥居が石垣のオモト山に対座しているのは、パイフタの神がオモト山から黒島に来た時に入った社（やしろ）に建てたのがこの御嶽とされるためである。現在、南風保多御嶽の「ウブツカサ」が島全体のウブツカサをしているため、八嶽（ヤーヤマ）の「元」（ムトゥ）ではないかと言う説もある。現在この御嶽のカミツカサは東盛家の子女が継承している。

その他、南風保多御嶽について、次の資料がある。

- ・喜舎場永珣『八重山民俗誌』（上巻）11～12頁。
- ・牧野 清「南風保多御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）322－323頁。
- ・運道武三『黒島誌』（1988年）71－72頁。
- ・通事孝作「御嶽めぐり 南風保多御嶽」（『八重山日報』1987年8月15日付）

4 東筋村の御嶽

(1) 比江地御嶽

比江地御嶽について、次の資料がある。

- ・喜舎場永珣『八重山民俗誌』（上巻）13～14頁。
- ・牧野 清「比屋地御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）338－340頁。
- ・運道武三『黒島誌』（1988年）80頁。
- ・通事孝作「御嶽めぐり 比江地御嶽」（『八重山日報』1987年10月7日付）

(2) 西神山御嶽

西神山御嶽について、次の資料がある。

- ・喜舎場永珣『八重山民俗誌』（上巻）14～15頁。
- ・牧野 清「北神山御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）328－329頁。

- ・ 運道武三『黒島誌』（1988年）74－75頁。
- ・ 通事孝作「御嶽めぐり 西神山御嶽」（『八重山日報』1987年5月7日付）

(3) 喜屋武御嶽

喜屋武御嶽について、次の資料がある。

- ・ 喜舎場永珣『八重山民俗誌』（上巻）12～13頁。
- ・ 牧野 清「喜屋武御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）330－331頁。
- ・ 運道武三『黒島誌』（1988年）76－77頁。
- ・ 通事孝作「御嶽めぐり 喜屋武御嶽」（『八重山日報』1987年4月25日付）

(4) 南神山御嶽

南神山御嶽について、次の資料がある。

- ・ 牧野 清「南神山御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）324－325頁。
- ・ 運道武三『黒島誌』（1988年）73－74頁。
- ・ 通事孝作「御嶽めぐり 南神山御嶽」（『八重山日報』1987年6月27日付）

(5) 阿名泊御嶽

阿名泊御嶽について、次の資料がある。

- ・ 牧野 清「阿名泊御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）332頁。
- ・ 運道武三『黒島誌』（1988年）78－79頁。
- ・ 通事孝作「御嶽めぐり 阿名泊御嶽」（『八重山日報』1987年10月10日付）

(6) 仲盛御嶽

仲盛御嶽について、次の資料がある。

- ・ 喜舎場永珣『八重山民俗誌』（上巻）14頁。
- ・ 牧野 清「仲盛御嶽」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）327－328頁。
- ・ 運道武三『黒島誌』72頁。
- ・ 通事孝作「御嶽めぐり 仲盛御嶽」（『八重山日報』1987年7月11日付）

(7) 乾震堂

乾震堂について、次の資料がある。

- ・ 牧野 清「乾震堂」『八重山のお嶽』（あーまん企画、1990年）336－337頁。
- ・ 運道武三『黒島誌』（1988年）81頁。

8 民俗芸能

黒島の伝統的な民俗芸能を保存継承するため、2008年（平成20）ごろの石垣在黒島郷友会の総会において、「黒島伝統民俗芸能保存会」の設立が認められ、同時に会則も制定された。会長を玻座真武が引き受ける。

1 黒島伝統民俗芸能保存会会則

第1条 (名称) 黒島伝統民俗芸能保存会と称する。

第2条 (目的) 黒島伝統民俗芸能を正しく継承し、黒島、郷友会に寄与する。

第3条 (会員) 黒島伝統民俗芸能に賛同する者。興味を持ち技能の修得を希望する者。
指導者として希望する者。黒島に関心のある方等々。

第4条 (事務局) 黒島郷友会に位置づけ、郷友会の活動とする。

①行事の唄、踊り②伝統芸能③レク、スポーツ活動

第5条 (経費) ①郷友会予算による助成、②会費③寄付金④その他

第6条 (役員) 会長1名、副会長4名、書記会計1名、顧問(指導者)若干名

活 動 内 容 (郷友会活動、黒島行事に関連づける)

1、お正月(唄、綱引き、ガーリ)

責任者(運道武志、東筋秀吉、宮良哲行、津田徹)

2、豊年祭(唄、舟漕ぎ競漕、巻き踊り)

責任者(野底幸生、津田兪、前本芙美子、大底ゆき子)

3、結願祭(弥勒、初番、踊り、狂言)

責任者(津田徹、貝盛長伴、当山喜一郎、大工正広)

4、舞踊(黒島の代表舞踊)

責任者(赤山正子、松山訓江、崎枝鶴子、玉代勢光子)

5、庭の芸能(棒、タイラク、獅子ヌ棒、獅子舞)

責任者(貝盛長伴、宮良当皓、津田良章、石良一則)

2 黒島伝統民俗芸能「庭の芸」に関する一考察

黒島の有史以来、うたい継がれてきた古謡には、ジラバ、ユンタ、アユウ、ユングトゥ等々のジャンルがある。この平坦な珊瑚礁の島で、人々の心にうたい継がれてきた先人達の功績に改めて尊敬の念でいっぱいである。黒島は四面を海に囲まれ、山もないが、海の幸、土の恵によって、一千人余の人々が暮らしていた歴史を振り返ることもできるが、やはり生活は厳しかったと考えられる。にもかかわらず黒島の古謡は、全般的に明るく、ユーモアあふれ、勇ましいものが多いのも不思議である。

行政が施行されない以前から、海岸周辺に点在していた集落は、後に宮里、仲本、東筋、伊古、保里、保慶の村々が行政の配下で治められるようになった。

ところで、黒島の古謡には、この六つのムラ(集落)と生き物(食べ物)が、海(魚介類)と陸(植物、穀物、動物)を結び付けて、村々が唄われている歌謡が幾つかあるところに特徴がある。

黒島は「タキフンチャヤ」(床)にたとえられたり(《島廻りじらば》参照)、「肝一チ、色一チ」という言葉を用いて、各村に平等的配慮がなされた要素が、行事や芸能を見渡してもよくわかる。一例を挙げると、「庭の芸能」で東南アジア系流の{狩の儀式(舞)}が一連の舞であるにもかかわらず、現存する四つの村でそれぞれ独立して継承されていることである。宮里(マイシトゥ)の「獅子舞(雌獅子)」、仲本(ナハントゥ)の「獅子舞(雄獅子)」、東筋(アースン)の「獅子ヌ棒」、保里(プウリ)の「タイラク」は、どれも村々の特色があり、実にすばらしい「庭の芸能」である。

「獅子舞」は、八重山郡内の村々、島々に数多く継承されているが、それぞれに特徴があり、差異がある。「獅子ヌ棒」は、新川村の「カンターボウ」に類似している。「タイラク」は、郡内では、黒島の保里村以外では、見たことがない特徴的な演目である。

一連の「庭の芸能」として、「タイラク」～「獅子ヌ棒」～「獅子舞」と、村々で独立して継承されているが、各村々の伝統を大切にしながら、黒島の「庭の芸能」として育成し、保存できたらすばらしい「庭の芸能」として評価できるのではと考えている。黒島をこよなく愛する先輩、後輩、黒島に関心のある皆様の指導助言、提起がいただけたらありがたい。

私事で恐縮だが、黒島郷友会50周年の記念行事を2005年（平成17）に実施し節目を終えた。2007年度（平成19）から石垣字会長に選任され27年ぶりに「結願祭」を多数のご指導、ご協力を頂き復活させることが出来た。ここ数年石垣字会役員、尚寿会と関わり、黒島郷友会行事への参加が疎遠がちになり、久しぶりに新年総会に参加するなかで先輩達の参加が少ないことに気づいた。役員は、若く、しかも三世、婿、嫁の中には、島の生活の未経験者がほとんどであったことに驚いた。

1968年（昭和43）に黒島民俗芸能保存会（代表・知念政範）を立ち上げた当時、古謡をうたえる方々が30余名集まって、黒島校の教室で一日ががり、古謡を録音した。録音器が現在のようにすぐれた器具でなく、しかも経験未熟な小生の能力で、収録のお手伝いするぐらいしかできなかったが、そのほとんどの方が他界された現在、これらは貴重な音源であろう。

黒島は、現在200名余で伝統行事の古謡（ジラバ、ユンタなど）や、庭の芸能を披露するには、数名なら可能であるが、20～30名の団体演技となると、島民だけでは十分に披露できない状況である。今後は、黒島公民館と連携し、黒島郷友会の活動の一環として伝統民俗芸能の保存育成と、演技者の育成を目的に、諸先輩方の演技保持者と若い郷友会の子弟がいっしょになって取り組んでいく計画なので、皆様のご理解とご協力をお願いしたい。

第一段階の取り組み（庭の芸）

棒術10組（20名）、獅子ヌ棒15組（30名）、獅子廻し2対（10名）、タイラク15組（30名）。

第二段階の取り組み（豊年祭行事）

舟漕ぎ、唄、巻き踊り（ガーリー）

舞踊（鉦踊り、鎌踊り、笠踊り、コームッサー）

棒術（各村々代表的な棒術）

第三段階の取り組み（総仕上げ）

実演披露会開催 郷友会創立60周年式典祝賀会での披露を予定した。

9 人生儀礼

1 産 育

(1) 産

嫁を迎えたら次は孫の生まれることを心待ちにするのが親心で、安産出産で五体満足で生まれることを期待し、禁忌は避けたいのが人情である。黒島では妊婦には、牛や豚を殺すところを見せない、行かせないとか、人が死んだ家には行かないように言われていた。

(2) 出 産

産室はシラと言って普通は裏座が使われた。産室の周囲に縄をはりめぐらせて魔除けとした風習があった。部屋を温めて、妊婦が冷えないように配慮した。産婆がいない島では一人か二人老練の方が産婆役でお産が行なわれた。

(3) 育

①養い親

子が病弱であった場合や早産したとき、男の子は男の方、女の子は女の方と相の合う人に養い親になってもらった。黒島で男の子の童名は祖父の名に肖りつけられた。

②マリヨイ（生後のお祝い）

生後四日目や十日目や三十日目に健康を祝ってご馳走を作り、家族や親戚で祝った。その時の和え物は、長命草に味噌や胡麻を混ぜたものを出した。

③タンカーヨイ（誕生祝い）

生後一年目を迎えたこの日は、床の間のある一番座で祝い品を飾り、命名を大きく掲げ、子には大きな餅を背負わせた。お膳には本、筆、鉛筆、そろばんなどをおいて子に取ってもらい儀式を行った。子の一挙一動に喜び、笑って、祝いの最高の雰囲気浸った。子どもは七歳、十三歳、成人祝いを経て大人になっていく。その後は二十五歳、三十七歳、四十九歳、六十一歳、七十三歳、八十五歳、九十七歳の生り年祝いがある。また八十八歳の「米寿祝い」も慣例となっている（*黒島の古老からの聞きとりや、宮城文『八重山生活誌』を参照）。

2 婚 姻

明和の天津波以前、黒島の海岸の周りには、数多くの集落があった。それ以降、仲本、東筋、伊古、保里、宮里、保慶（浮海）で成り立っていたころは、同集落内での婚姻がほとんどであった。それも身分制度による平民同士の婚姻が多数であったと思われる。

その後、宮里集落に変化が起こった。それは首里王府から流罪された士族が村の女と夫婦になり、また強制移住や分村による人々の交流、王朝支配下の島役人の賄い婦の関係も生まれたが、少ない士

族は、他の村の士族との婚姻が一般的であっただろう（大浜永宣『オヤケアカハチ・ホンカワラの乱と山陽姓一門の人々』参照）。

1970年代に、戦前から島で行われた「アイナマヨイ」を、石垣島で再現させたことがある。貝盛新平氏と大工源吉の指導のもと、当日大安に潮の干満を考慮しながら、朝の時間に若者青年数名で花嫁家に車、2 屯車を連ねて（黒島では荷車であった）訪ねる。媒酌人花婿が床の間、仏壇で結婚の詔を捧げ、鏡、筆筒など、鏡持ちの友人二人を共にして花婿家へ嫁入り、迎える方は爆竹や目出たい歌やジラバで花嫁を迎え入れる。他の村にも夜は提燈や松明などで祝ったようだが、これは仲本村の先輩の指導である。

現在、結婚式や披露宴は豪華で華やかとなり、案内者も200～300人になるのも普通である。それに伴い費用も大きくなるが、親はわが子のために、祝いを一大事業として親心を発揮している。昔から結婚は人生第二のスタートとして行われてきた。

3 葬 制

死の前兆を知らせるものとして、鳥の鳴声やピーダマ（火玉）がある。ピーダマがお墓の方向へ落ちたとき、屋敷の四つ角に祈祷するなどすると、タマシー（魂）を取り戻すことができるといわれていた。ピーダマが落ちるのを見るのも、死の前兆だといわれていた。

死が迫ると、家族は口々に名前を呼ぶが、静かに眠るように息が止まると、「マーラシタ」と死が確認される。

黒島における葬制は、すべて埋葬であったため、死や死後も神秘で恐れられていた。現在は島での埋葬はほとんどなく、石垣島や沖縄本島で火葬され、納骨だけをお墓にという現状である。そのため死人に対して怖さは薄れている。

1955年（昭和30）ごろまで、黒島での葬式の準備はまず湯を沸かすことから始めた。火を焚くために、3束、5束、7束、9束という奇数の藁束を使うならわしである。サカミズは、まず冷水を入れてから湯を入れ、それで最初に顔を洗う。これは死人が一番かわいがった子か孫が行う。死人は西枕に寝かせ、二番座に安置する。周囲に白黒の幕を張り巡らし、身内の者が幕内に入る。入棺して仏壇のある一番座へ遺体を移す。棺の中に入れるは、あの世への土産品として、手巾5～10枚と、その他は風呂敷に包んで仏壇の前に置く。葬式に先だって墓を開けるが、ティンガラでコンコンと三度叩いてから開けることになっている。ススキでサン（魔除け）を結びおく。

ちなみに、宮城文『八重山生活誌』によると、棺に入れる付属品として、ハンカチ、センス（男）、うちわ（女）、金欄織のタバコ入れ、夏・冬着物2枚、死んだ親へのお菓子、タバコ、手拭などが上げられている。

野辺送りには、四角と八角のトウル、ハタ（旗）4本を準備するが、これらは村人によって作成される（現在は葬儀屋に一任している）。また、位牌とコウモリ傘も準備する。位牌を二つ準備するのは、一つは仏壇へ、もう一つは墓に持つていくためである。

法要は死後1年、3年、7年、13年、25年、33年で終わるが、1年目をユニリヌソーコ、3年目（満2年）をミーティヌソーコーという。現在は火葬であるが、かつての洗骨は、3、5、7、9年のどこかの年に行うことになっている（「黒島の葬制」参照。これは崎原恒新による聞き取り調査である）。

10 医療

黒島ではかつて医介輔が活躍していた。医介輔とはアジア・太平洋戦争に従事していた者や衛生兵で経験のある者が米国海軍郡政府布告により介輔(MedicalServiceMan)として身分が公認された制度で、医師の居ない僻地などで活躍した。

黒島においては医介輔の城田信廣が1950年(昭和25)から2003年(平成15)6月まで黒島で診察を行ってきた。城田信廣の引退後、黒島は無医地区となる。城田以前は大正時代から7人が開業して黒島の医療に従事してきた。2003年(同15)3月から石垣市内のやいま中央クリニックが町立黒島診療所で週一回の診察を行ったが、2005年(同17)3月で終了した。黒島からは城田信廣が引退を表明した時点から公民館が中心となって常駐医確保の要請が度々行われ、視察に来た医師が何名かいたが、常駐医確保には至っていない。妻が黒島出身という石垣市の医師・城所望が、石垣市の許可をもらって2005年(同17)12月8日から常駐医が確保されるまで週に一度、毎週木曜日の自身の休日を充てて診察のために来島した。黒島で急患が発生した場合は定期船の時間に近ければ定期船に乗せて定刻前に出港させたり、出港したばかりの定期船を引き返させたりする。また、西表島から石垣島に向かう船がある場合は、黒島を経由させて搬送する。黒島を含む竹富町の島々は石西礁湖(せきせいしょうこ)と呼ばれる浅い海域で、干潮時はサンゴ礁が露出する海域で、夜間は座礁の危険があることから定期船は運航しない。したがって、夜間の急患は海上保安庁のヘリで急患の搬送が行われるが、ヘリ要請の手続きに時間がかかりすぎるため、実際にはヘリによる搬送が最も早い手段にもかかわらず、夜間以外は利用するメリットが無い。黒島における暮らしは石垣島から近く、定期船も多いことから石垣市内に用事で出向いても日帰りで済むことも多く、沖縄本島周辺離島から比較すると恵まれている環境であるといえる。

しかし、陸路で市街地と繋がっていないという面では医療の面に対しての不安は大きい。黒島のような医師が常駐していない地域の妊婦は、出産予定日の1カ月前から石垣島滞在を要望し、その経済的負担や出産までただ孤独に待ち続けるという精神的な負担は大きい。また、現在行われている週一回診察では間に合わないお年寄りも、元気でも施設に入所しているという現実も多い。また、台風時はヘリも飛ばないため、不安を抱える妊婦や人工透析が必要な島民は台風の度に石垣島に渡って台風の通過を待つ。妊婦やお年寄り以外でも黒島での居住を希望するものの、病弱な子どもを抱えるために居住は石垣島に置き、仕事は黒島に通うという生活をしている黒島出身者も存在する。

夏場の観光客の宿泊数は年々増加し、島に夜間滞在する人数は人口の倍になるころもある。実際に観光客が急患としてヘリ搬送されるケースも出ており、医療レベルの向上も求められている。2006年(同18)2月に供用が開始された浮棧橋は黒島のバリアフリー化の大きな一歩となり、観光施設などのバリアフリー化も徐々に整っていき、高齢者の石垣への通院や、障害者や高齢者の黒島観光や帰省に道を開いた。

11 神話・伝説・民話

1 記録された伝承

(1) 竹原孫恭編著『ばがー島 八重山の民話』(大同デザインセンター、1978年)

「^{フシマ}黒島は^{フシマ}星島」(横目喜良)、「星運勢の願事」(神山とみ)、「雨の神」(横目喜良)、「カタガシの島」(兼城昌一)、「^{トウ}唐の^{ウフザ}老爺」(本成善資)、「マキドマリの漁場争い」(上原重信)、「多良間真牛」(宮良勇吉) 7話。()内は話者。

(2) 幸地厚吉『さふじま』(1987年)

『さふじま』には、第二章「民話・伝説」(41～47頁)を設けて、黒島を中心とした(他島の話も含む)、次の72話を収録している。

「アマン世の昔話」、「黒島で八御嶽に付いて昔話」、「蚤と衣虱の話」、「女の頓智には負ける」、「黒島には山がない」、「蛇は千年も生きる」、「黒島の生れた当時の話し」、「パダラ神の話」、「神様が人間に夜明を知らずについて」、「神様は人間が朝から晩まで働き過ぎるのを見て、牛と馬を人間の加勢に命じて行かした」、「牛の角の話し」、「人間の生れ始まりの昔話し」、「ハブシャーマ鳥の話」、「雑草についての昔話」、「セイロンベンケイ草(ソーシキの葉)」、「弥勒と^{ママ}釈加の話」、「黒島の弥勒の由来」、「子供の正直の話」、「老鳥の知恵の話」、「鳥の欲ばり」、「鳥と猫」、「夫婦別れの話」、「クイナ(水鶏)の話」、「私の思いで話」、「鶉の昔話」、「鶏が卵を産んで鳴きさわぐ話」、「魚取り網の始まり」、「犬と猫の話」、「鳥と尾長鳥の話」、「蠅と蛙の話」、「鼻をかんでクスクエーと言う」、「百姓とミミズの話」、「百姓と侍の話」、「渡嘉敷パークの話」、「パークの競馬の話」、「食べ物に^メ(シメ)を結ぶ始まり」、「泥棒の話」、「地震についての話」、「黒島での地震の話し」、「火事について」、「百足旗の由来」、「手相の話」、「赤マタの始まり」、「親孝行の話」、「後世(グソウ)の有る無しの話」、「昔話」、「ユイピスン加那志」、「仲の悪い夫婦の話」、「波照間島で油雨の話」、「大麦(パダハムン)をつく時水を入れてつく始まり」、「位牌の始まり」、「宮里村の旗頭と獅子」、「金持ちと子持ちの話」、「八十八の米の祝の始まり」、「黒島での津波の話」、「黒島から移住を命じた部落」、「宮里村に残された文化財(アブナピヌフンシ)」、「ピナシサバ(学名シュモクサメ)の伝説黒島史」、「美珍嶽の由来」、「パイガ星の伝説」、「黒島番所の由来」、「公事御嶽の神信仰に付いて」、「番所火の神に付いて」、「乾震堂に付いて」、「水中眼鏡発明に付いて」、「製糖圧搾牛車木制」、「学問について」、「黒島史にある比屋根翁に付いて」、「牛の改良に付いて(西洋品種シンメンタール種子牛)」、「黒島口竹富島の東干瀬切り始り」、「黒島人物養成の為に」、「毒亀に付いて」。

(3) 運道武三『黒島誌』(1988年)

『黒島誌』には、「黒島の神話及び伝説」の項目を設け、次の6話を収録している。「黒島の創世神話」、「黒島の弥勒の由来」、「百足旗の由来」、「黒島の雨乞いの祖」、「黒島の^{コーモリ}高盛の構築について(史的考察)」、「ユイピスン加那志」。

2 創世神話

「黒島の創世神話と部落の創立」(『八重山民俗誌』(上巻) 沖縄タイムス社、1977年、6～7頁)

地質学の権威者達は、今から二百万年前に、地球上の生物界に於いて、第四回目の大進化を見ると共に、人類が始めて地球上に出現したと言っている。この人類の出現と共に地球上には、又大氷河時代が、やって来たのである。この大氷河時代に於いて南太平洋上に、散点している珊瑚礁(環礁)などは隆起したものだと言っている。して見ると、我が黒島などの珊瑚礁などもその頃から隆起し始めたものであるか、或は後れて創世したものであるか記録もなければ微すべき文献なきために判然しないが、これによって考えると、黒島の創世は悠久なものであったことが想像される。古老達の語る開闢神話によると、珊瑚礁の石の島に住んだ原始人はまず第一に石と闘った神話である。この石をかき分け、石と闘って農耕した先住民のこの涙ぐましい苦闘を見兼ね、深く同情されたのが、マキパダラの神であった。この神は天降りされて島の石を片付けて下さったということである。其の神の姿は拝まれぬが、石がひとりで動いているのと其の石の片付けられる音とに島人は畏敬の眼を以て眺めていたということである。ここに於いて島人はこの神の偉業とその廣大無辺なる鴻恩に感謝感激し、叩頭感泣して合掌礼拝をしたのである。それから後は、住民は容易に農耕に従事することが出来たと言っている。

古老達の伝承によると、最初に誕生した村を東里村と称したが、村の繁栄と共に、山崎村、南フタ村の二村に分村し、其の後ンギスト村、仲本村、イラバラ村、崎原村、ナンザト村等が創立されるようになった。それから崎原村、アロースク村、サーバル村、フナト村、ナンザト村の五ヶ村を総称して東筋村と称するようになった。往古、黒島村の一部に津波があった。その津波のために相当部落は流潰にあつたと言っている。その津波前にあつた部落は七つあつた。即ち山崎村、南フタ村、ンギスト村、中シトゥ村、イラバラ村、崎原村、仲本村がこれである。この七部落は海岸へ近所に誕生していたので、この津波のために災害を蒙つたのでンギスト村の仲本家の祖が後難を恐れて現在の仲本部落の場所へ移転したので、他の七部落を全部合併し、以つて仲本家の屋号を用いて仲本村と称するようになったという。

一六五一年(慶安四年)の人口調査の記録を見ると、黒島は黒島村が人口二九九人で、保里(フウリ)村が二八二人とある。一七三七年(元文二年)の記録によると、黒島は黒島村が四五八人、東筋(アガリスジ)村二七五人、保里(フウリ)村人口三一五人とある。右の記録によると、宮里(メンザトウ)、仲本(ナカントウ)、保慶(フキ)伊古(イク)の四部落名がなく、又何時創立されたとの記録もないが、若し当時から創立されていたものとしたら、黒島村は宮里、仲本、保慶の三部落であり、東筋は伊古が之に加わり保里というようになったらしく考えられる。其の後一七五三年(宝暦三年)の人口調査表からは六ヶ部落を一円として黒島村と改称し、人口一四一七人を算する大きな村となったのである。

3 神話・伝説・民話

(1) 浮海(フキ)お嶽の神の由来

浮慶村の漁師が夜網を持って漁りに出かけ網で囲いかかった魚を取ろうとするが浮いた石が網にかかり網の外へ投げ捨てても何回してもその石は網にかかり不思議な石だと思ひ海岸の近くにおいて家

路にそして翌晩又漁りに出かけ、昨日の石に手を合わせ邪魔せず大漁を祈願し網を囲んだところ魚がたくさんかかり村中の家々へ配り喜ばれました。翌日からは毎日のように大漁続きでしたので村中が拝むようになりフキ村、マイシト村のお嶽として1980年代まで信仰されていました。(古老のお話)

(2) サメに助けられた多良間真牛

黒島は、水田はもちろんなく常食は、芋粟、黍と副食は岩盤の上のわずかな土で栽培される野菜、四方を海に囲まれた魚介類で質素で日々の暮らしもままならず特産物らしものもなく主食の粟、黍も、年貢として納めなければならない上に米の上納である。黒島は西表島の(現美原地区黒島田と呼ばれている)田作りは、小船で荒海を渡り命がけの仕事であり、黒島の農民は稲作は専門ではない。エピソードとして琉球王庁と呼ばれて表彰されたということですが米の上納は琉球王庁にとってはいかに重要だったかが伺える。

強制移住制度は、琉球王庁の財政確保のため15歳から50歳の頭数に課せられたのが人頭税であり言語道断な悪劣な税制であり、王庁の政策として米の増産は重要な政策で風土病マラリアの発生する地区に移住させられた黒島関係は伊原間村、野底村でこの村も廃村の予定であったが黒島村は人口増加にもかかわらず、土地は狭く人頭税の増収も意のごとくならなかった。これに反して石垣島川平村の所属地、裏石垣の野底というところは、原野は広く地質肥沃であったので、1732年(享保17)、黒島民として野底村を創設し、与人、目差を村行政にあたらせたが風土病のために村は年々衰微していった。記録には、「戸数10戸、人口25人(男13女12)夫婦4組、他は寡独であり、村の周囲には廃田多くまた空き屋敷も多く遠からずは廃村となるべし」はたして明治38年(1905)創立173年の歴史をもって幕を閉じた。(※笹森儀助『南島探験』参照)

(3) 造船航海の神話と船浦御嶽(『八重山民俗誌』〈上巻〉沖縄タイムス社、1977年7～9頁)

神代の昔、竹富島の仲筋村に兄妹が二人おった。兄を島仲といい、妹を栗礼志^{アハレシ}と称した。島仲七歳の時、栗礼志五歳の時であった。共にほさきという海岸に行って遊んでいたが、兄の島仲は三日月のような船形を見付け二人共其の異様の型に驚き且つ見とれていたが、しばらくして覚ることが出来た。これは神が与えて下さった船形であって、これに似せて造船し、以って航海の用に供せよとの意であるに相違ないと大いに感激し、さっそく山中に入って船材を伐り出し、其の船形のように模造し以って始めて船を造った。これが八重山に於ける造船の始めだという。時に妹は食膳を持って兄の所へ来たので兄は妹に向い、汝願わくば早く成長し神に祈願し神から船名を賜わりたいものだと言った。然して兄の念願が相叶い、神は船号を「五包七包」と命名して妹に託宣し給ったのである。其上神は兄に命じて海上をこの船で航海せよと宣り給ったので、兄は神命を謹んで承り大いに喜び早速新造船に乗って海上を漕いで独り楽しんでいたが、其後船は激浪のために漂流してしまった。兄はやるせなく無念に思っていたところ、幸にも黒島に漂着したので彼の島人が之れを拾得し、大いに喜び之に擬して船を造り竹富島へ始めて航海して来たので島仲は之を見て大いに喜び造船の顛末を詳細に彼等から聞いて始めて自分の船が黒島に漂着して其の船を模造したことなども知ったのである。それで八重山に於ける造船の始めは竹富島であったが、航海の始めは黒島であったので、両方に造船所を設置して造船業を開始したのである。

黒島村最初の造船所は南^{ハイ}フタ村のまき泊であったが、其の後宮里村の船浦に造船所を移転し、以って造船業を盛んにし、茲に船浦御嶽を創建したのである。船浦御嶽は造船中の祈願所と航海安全と進

水式（すらおろし）の儀式等のときツカサ司を始め、大工並びに村民等が御嶽に参詣して儀式を行った所である。

竹富島に置かれた造船所は何時廃止になったか記録の微すべきものが無いために判然しないが、諸文献から推考すると早くに廃止になったように考えられる。独り黒島の造船所だけが継続して事業をしていたようである。一六七八年（延宝六年）、今から二七二年前黒島の造船所は古見村へ移転したと記録に見えている。其の移転の理由は船材の蒐集上不便であることと、資材の運漕と造船日数が長びく事などのために資材の豊富な古見村へ移転されたわけである。其の後、石垣島の字石垣村の俗称「古見船浦」にも造船所が移転されたわけである。古見から移転されたから古見船浦の名称を附したわけである。八重山の造船は一七三二年（享保一七年）迄は木造地船であったが、翌享保一八年から一隻だけは馬艦船形に変更し、其の翌年享保一十九年からは三隻共に馬艦船形に改変されたという。

山陽姓第五世花城長季氏は、カリワカテイフグ仮若文字職勤務中一七三一年（享保一六年）七反帆船を馬艦船に改造の時、造船作事筆者を命じられたが、其の年から八重山に始めて馬艦船が始められたと其の系図に詳記してある。

ヤエヤママイリツカイジョウ八重山参遣状という記録にも一七三一年（享保一六年）に首里王府から宮古、八重山両島は本年から馬艦船形に造船を改造せよと通達されている。早速と同年から宮古用の馬艦船を八重山造船所で造船している記録がある。又翌享保一七年に八重山用の大浜馬艦船三百四十石積を造船した記録が参遣状の公文書にある。以上の山陽姓の系図と参遣状の古記録からすると慶来慶田城由来記の記録の年代は二ヶ年間の誤差があるようである。

(4) パイガ星の伝説（『さふじま』73頁）

昔、黒島で部落は不明、乳の四つある女の子が生まれた。其の子はすくすく育ち、程々に成長し夫婦の縁組もされ、お嫁に行き暮らす内に男子が生まれたので非常に喜び、大切に育てて居た。琉球王府で王様が病気になり、針灸師や医者の色々診断の結果、王様の病気の薬は乳の四つある女の生肝臓をあげないと病気はなおらないとの事で、沖縄の島々、宮古、八重山の各離島を調べる内に、八重山の黒島に五才なる男の子を一人産んだ女をみつけた。係の役人は犬猫を捕むようにつれ去ろうとすると、私には五才になる男の子が居りますから許して下さいと願った。係役は王様の命令だから許す事は出来ない。親子三人は抱合って居たが、女は上からの命令だから仕方なく捕われて行くが、万一殺されたら印に午の方位に大きな星を出して見せると遺言し、抱き合っている親子を、係官は引削くようにつれ去った。残る親子は毎日泣き暮してる内に、遺言通り星があらわれた。父親は苦しみのはて、病気にかゝり亡くなった。残された子は自力で程々に成長して畑仕事に行き、雨が降ったので雨屋どりで誦ったのがパイガ星の謡とさ。

(5) 南風が星

200余年前、宮里村に住んでいた女に乳房が三つあり、子ども二人を連れて暮らしていた。村の役人がそれを首里王に報告したところ、「これはめずらしい。すぐに油を取っておくれ」ということで大きな鍋が届けられた。役人は乳房の3つある女を鍋に入れ、油をとって首里王におくったということが伝えられている。二人子どものうち女の子は母親と一緒にこの世を去ったが残された男の子は独り者となり、畑仕事をしながら、母親を偲びつつ唄って、心を癒していた。雨もやんで晴れ、太陽が西の山へ沈んだので木の下から出て南の空を見たら大きな星が2つ上がって見えたので、これがわが

親だと思った。「南風が星まじりたるきどんなよ」「五つには母親とはなれ」「七つには父親ともはなれ」そのうたわれた歌がいわゆる「南風が星」となって現在でも歌い継がれている。(口承者・高那真牛)

(6) マペラチジラバ伝

マペラチとは人の名前である。仲本村の人で幼いときに父母と死別し、貧困な暮らしをしているところを村の人々がマペラチをその叔母さんに知らせ養育させた。しかしながら叔父叔母は、よい育て方をしなかったようである。畑仕事に行かされ、薪拾い、その他牛馬のようにこき使われた。その都度、亡き父母を偲び、悲哀苦難の日々を送っていたとのことである。マペラチの幼少から成人するまでの成長ぶりが唄われたのが「マペラチジラバ」である。(口承者・広沢オモイツ)この歌は、古謡として又舞踊に広く郷土芸能で発表されている。

(7) 山崎ぬアブゼーマ伝

200余年前、黒島の山崎村(現仲本村の南東)に住んでいたアブゼーマのしわざをうたった唄が「アブゼーマ」(男老人)なのである。ある日アブゼーマは、畑で草摘みをしている若い女をだまして遊んでいるところをアブゼーマの妻ンギサマにみつげられて争いになった。そのときの争いの出来事が唄となった。今日ではアブゼーマ、ンギサマ夫婦の面もできて宴会のあるたびに「山崎ぬアブゼーマ」としてユーモア、滑稽で雰囲気盛りあげる。(口承者・小浜廉好)

(8) 多良間真牛伝

1843年(道光23)旧1月25日、真牛はウラダ(西表古見村)に田植えのためくり舟で出発したが、途中風波が荒れだし、激流の波に飲まれた舟はみるまに沈み、命からがら箱や流木にすがりついて漂い、3日間後波照間島と新城島東南方にある無人島にたどりついた。そこで山イモや魚を獲って食べ、数カ月間暮らした。

ある夜、真牛は黒島に帰るよにという夢を見た。夜、松明をつけて魚を獲っていると大きな鮫がやって来て真牛を乗せて泳いだ。同年6月7日、仲本村東(アーザト)と称する珊瑚礁150mぐらい沖に来たとき、鮫(フカ)は、海底に沈み東方へ泳いで行った。同年6月27日黒島着。およそ150年前のことと明記されている。現在でも子孫はフカを食べないと言い伝わっている。(*口承者・多良間嘉奈)

(9) イサンチャーの由来

黒島初代役人として高嶺方昌が黒島首里大屋子職につかれて保里村に番所を置き役職をつかさどる。およそ300年前、相並んで妻カナシのお墓も作られた。石で作られたのでイサンチャーと称している(*口承者・竹越堅一)

(10) 人石の話

仲本村に人石という石がある。この石には、次のような話がある。このあたりは按司が非常に横暴を振るっていたので「3人ずれでなければ、安心して仕事できない」と言われるほどであった。それは、フカスク、ブウスク、クスリチの三按司がいて互いに勢力争いをやっていたために、この地区で働く農民は、常に身の危険を感じなければならなかった。それで畑仕事に出るときは三按司の城のあ

る三方向に絶えず気が配られるよう3人一組で畑仕事に従事していた、ある時、3人の兄弟が畑仕事をしていると突如そこに按司が現われた。3人の兄弟は弓を射かけようとする按司を後に一目散に逃げたがそのうち一人がそこにあった大きな石に自分の着ていた着物をかけて逃げた、按司はその石を人と思ひ矢を射かけたところ、石に矢が当たりはねかえって逆に按司に当たって死んでしまったと言う。それ以来、その石を人石といい、人の身代わりをした石とよぶようになったと伝えられている。

12 ことわざ

幸地厚吉『さふじま』に収録されたことわざを参照し、()内に直訳を施した。

- (1) アールティダドゥワーム
(上がる太陽〈御主〉を拝む)
- (2) アンティーユルクブナ ナーヌンティナクナ
(有ると喜ぶな 無いと泣くな)
- (3) アバティルハンヤアナーナーヌン
(慌てる蟹は穴を探せない)
- (4) アトゥフウードマーフー
(後富が真富) 最後まで待つ内に幸運が廻る
- (5) アバリムノー ナハヤナーヌン
(美人は人情が浅い)
- (6) アカンゴーマー ナナパダハールン
(赤子は七肌変わる)
- (7) アルスデー フラリールン ナーンスデー フラルヌン
(有る袖は振られる、無い袖は振れない)
- (8) アーサーズウヤ スクナード ミーヤアル
(海苔汁は底に実あり)
- (9) イードシユウトゥミルカ タタミヌパナンドビル
(良い友達と交われば畳の上に座る)
- (10) イークトウヤーパァーク
(善事ははやく)
- (11) ウヤファハイヤー ファーハラ
(親子の中の睦まじさは子供から)
- (12) ウヤヌブンゲ ハアマジヌキートゥ アーシ パズバン パザルヌン
(親の恩義髪毛以上尽しても返せない)
- (13) ウイピソー ヤラビトウド アマイル
(老人は童と甘える。子供に返る)
- (14) ウイピソ シカイド パダ
(老人は働くほど、若返る)
- (15) ウトザー スラハド ニウー

(血族は遠く引くほど似て行く)

- (16) ウカトゥ ヤンマイヤ ハザミナ
(負債と病気は隠すな)
- (17) ウムティヌ ハワルニン キムククルン ハワリドシル
(顔の変わるように肝心も変る)
- (18) ウクナイヤ ムスヌフウヌ トゥールニン
(行いはムシロの筋の通るように)
- (19) ウヤヌマアラセーハラド ウヤヌプコーラサーバハル
(親が死んでから親のありがたさが分かる)
- (20) ウヤユ ウムイ ナシルファ ファンド ウムイナハリ
(親をいじめる子は自分の子にいじめられる)
- (21) ウイピソー タカラド
(老人は宝だよ)
- (22) ガラシヌフニンカイ ナキシルカ タベハラヌ ソーシカリルン
(鳥の船向ひ鳴きは 旅先から便りがある)
- (23) キムヌアルカ フクンアン
(肝があれば肺もある) (真心は福を招く)
- (24) キイヌマガラ ノーホリルン ピスヌマガラ ノーラヌン
(木の曲げは直せる、人の曲げ直らない)
- (25) キナイヌ ミサ ヤッサー トウジユイ
(家内の良し悪しは妻による)
- (26) キョーダイヤ マミヌウピスツツンヌン バキドファウ
(兄弟は豆一粒も分けて食べる)
- (27) コウキヌ ピスプリ
(堅い木が一折れする)
- (28) ゴウナケー ハジヌ ナナムシ フクカ ナナムシ ナンヌナルン
(桑の木は暴風が七回吹くと、七回、実を着ける)
- (29) サキヌンピソー サキヌンピスヌ ヤーハド ユラウ
(酒飲み人は酒飲べの家に集まる)
- (30) ジントウウヤトー イチンアンティ ウムナ
(お金と親とはいつまでもあると思うな)
- (31) シトムティ ユナイヌ キガキ シイド ピソーブール
(朝晩の気掛けで人を追い越す)
- (32) シグトー シグトゥヌド ナラーシル
(仕事は仕事が教える)
- (33) シキン サンムノウ パルヌミーハラ ティンバ ミル
(世間を知らない者は、針の穴から天を見る)
- (34) シンジチヌ アダ ナルン
(真実が仇になることがある)

- (35) シキ ピヌチュ ユダン スウヌン
(月、太陽は油断しない)
- (36) シグトゥヌナランムノー ダングド イズ
(仕事の下手な者は道具にケチをつける)
- (37) ウヌピスヌ パナシ バタブニヌ コーリケ バラハラリルワ。
(この人の話 腹骨の固まるほど 笑わせる)
- (38) シチナビハラ ハニナビヌ マリルン
(土地鍋から金鍋が生まれる)
- (39) シンドヌ、ウラハルカ、フネパラヌン
(船頭が多ければ船は走らない)
- (40) スクリムノー、ミイルカ、フビド、ダリル
(農作物は実れば首を垂れる)
- (41) ソンガチェ、ヤリキン、キサバン、フルマイヤパザハキナ
(正月は破れ着物を着けても赤飯はかかすな)
- (42) ソウダングトー、ウブサン、ハタジキリ
(相談事は多数によって決めれ)

13 生業・産業

1 農業

黒島における農業はサンゴが隆起してできたとされる地質のため岩盤が多く表土が薄い。水は地下に浸透又は蒸発し表層を流れる河川が形成されないうえ、井戸水には塩分が混ざることから水には恵まれない。したがって島内での稲作はおこなわれなかったが平成まで現美原地区の田は、西表巢真ほか3名の名義で黒島公民館が管理していた。この黒島田での稲づくりには、悲劇というか鯨に助けられた「多良間真牛」が首里王から授けられた掛図がある。黒島のおもな農作物は芋、粟、黍、麦、大豆であり、今でこそ畜産が基幹産業であるが、サトウキビや玉ねぎ、葉タバコの生産が盛んな時期もあった。

1950年代までは穀物類や芋などにすべての畑が利用された。当時はタバコなどの産業に努力したが、仕事を求めて島外へ転出する若者が増え、それに伴って児童生徒数も年ごとに激減した。1972年(昭和47)の本土復帰を境に、本土企業の土地買占めなどにより、穀物類の農業は壊滅状態になる。これまで繋ぎ飼っていた畜産は牧場へと大きく変遷する。現在全島が牧場化され、昔の面影はまったくくない。

(1) サトウキビ

黒島はかつて八重山一の良質の黒糖を生産していた。現在は牛の島として有名になったが、1925年(大正14)ごろは黒島の戸数180戸(*『八重山郡勢要覧』1925年参照)のうち、170戸がサトウキビを栽培していたという。他の島々同様、サトウキビは重要な換金作物であったのである。黒島は水事情のきびしい反面土質がサトウキビ栽培に適しており、高い糖度のサトウキビが収穫された。

戦後、換金作物の復興が叫ばれ、四カ村で製糖工場ができたことに伴って、サトウキビ生産が盛んになった。そのうち中型工場が必要となり学校の南側の畑でボーリング調査が行われたが、1957年(昭和32)、地下水は塩分が強いため工場用水は不可能と判明した。人口は1,100余名、児童生徒300余名、それに70余名いた青年会員も、石垣島や沖縄本島へ職を求めて流出し、小中学校児童生徒数も100名以下に減少し過疎化が急激に進んだ。また、高校進学とともに島外へ引っ越す家庭が増えていった。島の換金作物の大きな収入は黒糖であり、島の生活と子弟の教育のための仕送りの厳しさが石垣や沖縄へと引っ越す家庭が仕事と進学する子どもの将来を重点に島の農業のありかたにも変化があらわれ、サトウキビ畑が今日の畜産業へと代わっていくことになった。

(2) サツマイモ

稲作のできない黒島では、サツマイモ(甘藷)が主食で粟や黍などの穀物が食料として重要な農作物であった。終戦直後も芋で飢えを乗り越えることができた。沖縄において甘藷栽培の歴史は古く、15~16世紀ごろと考えられている。

家々の井戸端には石ドーニーという芋洗いの専用の民具があった。紅宮七号に改良されるまでいろいろ改良され主食用や酒の材料に利用された。昭和30年代、パイラス病で島全体の芋が消滅してしまった。

(3) 玉ねぎ

1960年代に中型製糖工場の建設が不可能のため、玉ねぎがサトウキビと輪作として試みられた。玉ねぎは島の土壌に適しており、品質も高く評価され石垣や沖縄本島に換金作物として出荷された。しかし、玉ねぎの病気が発生して1970年代に生産が衰退した。

(4) 葉タバコ

換金作物を模索する黒島はサトウキビ、玉ねぎにつぐ葉タバコの指導を受け4カ村で生産と乾燥施設ができ、生産を始めた。葉タバコは、10年ほど生産されたが、長く続かなかった。

2 酒造業

八重山民謡の《八重山育ち》は八重山の島々の特色をうたっている。そのなかで、黒島は「粟酒飲んでの」という歌詞があり、粟を原料とした地酒が有名であることがわかる。黒島は粟の産地でもあり、各村に酒造所があり、西表島や新城島、鳩間島などからも買い求めにきていた。米のできない黒島は、物々交換では米と酒が交換された。もちろん、酒の原料は粟であり、後に輸入米が使われたが、黒島の酒造業は昭和30年代で幕を閉じた。

3 養蚕

養蚕業といえば、群馬県の富岡製糸工場が有名で、明治時代から国内はもちろん、西洋の製糸工業にも劣らず、国内各地の養蚕業は栄えた歴史がある。黒島でも明治、大正、そして昭和20年代まで各家庭では養蚕業が営まれていた。

換金作物が少ない島では、飼育のため一番座から三番座、裏座まで蚕の棚で埋め尽くされた。屋敷内には桑の木が植えられ、蚕の餌である桑の葉を得るために、空き屋敷や畑は桑で埋められた。また、

各集落には飼育場が造られ、蚕の飼育指導に石垣島からの専門の方が来て指導した。その飼育場は、後に集会場（公民館）として利用された。

琉球王朝時代から織物は盛んで、各島の上納品として、今日の八重山上布、宮古上布、芭蕉布やミンサーなど、伝統織物が確立され今日に至っている。

14 郷友会活動

1 石垣在黑島郷友会

(1) 経緯

1945年（昭和20）8月15日の終戦によって、県内、県外、国外から引揚者で黒島の人口は1,584人、うち児童生徒数は397名と膨れ上がり、ソテツ地獄といわれたほどの食糧不足、家には人が溢れ、職も皆無の状態だった。戦後しばらくして、世の中が落ち着きを取り戻すころ、生業を求めて石垣島、沖縄本島や県外、国外へと故郷を後にし、行政職、漁協、大工、その他数多い分野へと進み始めたのが昭和30年代の初期である。

「黒島をふるさと」とする先輩たちによって、「黒島出身者の支援を深め会員相互の親睦と互助を図り、郷土及び居住地域の発展に寄与する」ことを目的として、郷友会が発足した。1956年（昭和31）は郷友会活動の第一歩である。当時、郷友会の立ち上げに携わった方々は、玻座真長和、仲盛富太郎、富里長昌、仲本辰雄、国吉賢英、山田繁、山田昇、又吉智清らが中心となって活動した。初代会長に玻座真長和が就任し、郷友会がスタートした。当時はほとんどの方が借家か間借りが多く会議場所や運営に苦勞した。

会員も次第に増え、独自で敬老会を開催するようになった。老人に対して尊敬と感謝、並びに親睦を兼ねて開催されたのが、第4代会長・富里長昌氏である。黒島郷友会として、1965年（同40）に10周年記念式典と敬老会が山田ビルで開催され、61歳以上50名と70歳以上22名の計72名が敬老者として招待された。真栄里村、黒島の代表が出席して式典・祝賀会が盛大に挙行された（第10代会長・山田繁）。

1963年（昭和38）8月に催された黒島古典芸能発表会（第12代会長・仲盛富太郎）は、郷友会の基金造りと郷土芸能の保存を目的として南宝劇場、丸映館、興業ホールで公演され好評を得た。同時に郷友会運営資金としてまた、会員への互助資金として以来、郷友会活動を支える原動力となっている。年中行事も定着し、親睦大運動会、伝統芸能が行われている。

(2) 石垣在黑島郷友会歴代会長

代	氏名	備考
初代	玻座真長和	
2代	仲盛富太郎	
3～4代	富里長昌	
5～6代	又吉智清	

7～8代	仲本辰雄	
9代	仲盛富太郎	
10代	山田 繁	
11代	国吉賢英	
12代	仲盛富太郎	
13代	本成善康	
14代	運道武三	
15代	知念政行	
16代	大川賢一	
17代	上原重信	
18代	當山哲男	
19代	金城 清	
20代	宮良長重	
21代	本原要吉	
22代	大工源吉	
23代	渡久山長四	
24代	豊村光清	
25代	本原孫宗	
26代	本原孫宗	
27代	東舟道 博	
28代	玻座真 武	
29代	保里源秀	
30代	本原孫宗	
31代	本原孫宗	
32代	運道武良	
33代	東筋秀仁	
34代	新城 純	
35代	新城 純	
36代	津田 徹	
37代	小浜廉忠	
38代	東兼久正吉	
39代	玉吉秀英	
40代	新城 純	40周年芸能
41代	知念盛泰	
42代	神山善助	
43代	多良間 勉	
44代	玻座真 武	故郷訪問大運動会
45代	山田忠弘	
46代	新城悦子	
47代		
48代	富里長敏	
49代	玻座真 武	

50代	玻 座 真 武	50周年記念式典、並びに敬老会
51代	比 屋 定 恵	
52代	銘 里 君 夫	
53代	鳩 間 真 英	
54代	鳩 間 真 英	
55代	貝 盛 長 伴	
56代	貝 盛 長 伴	
57代	玉 代 勢 泰 寛	
58代	運 道 芳 三	
59代	西 表 隆 夫	60周年記念式典、並びに敬老祝賀会

(3) 周年事業

(岡崎会館を中心に) 30周年(第30代会長・本原孫宗)は、登野城公民館で式典と歴代会長へ感謝状贈呈が行われた。

40周年には、石垣市民会館大ホールで島の伝統芸能まつりを発表(第40代会長・新城純)。

50周年は、(第50代会長・玻座真武)は、2005年(平成17)にホテル日航で行われた。歴代会長へ感謝状贈呈敬老会(70歳以上170名を招待)を挙行し、50年の節目を祝った。

(4) 新パーリー造船

島最大の行事ブーン(豊年祭)のパーリーが老朽化しているため(公民館長・島仲三郎)や多くの会員の要望もあり、石垣在黒島郷友会(第28代会長・玻座真武)を中心に公民館、沖縄郷友会(神山光祐)、関東、関西郷友会にも呼びかけ、募金を依頼し、二艘と舟屋を完成した。2009年度(平成21)まで使用した。2010年度(同22)から公民館(館長・島仲秀憲)を中心に新パーリーで豊年祭を迎えている。

(5) その他

牛まつりの初期は、島おこしとして竹富町も助成金を出して奨励し、石垣在郷友会も伝統芸能を提供するなどして協力した。また、「ふるさと訪問親睦大運動会」を企画し、黒島校で郷友会(第44代会長・玻座真武)の4チーム300名余と公民館チームで交流を図った。現在は観光客も増加し、牛まつりは島の一大イベントとして3千人余が訪れる。

2 沖縄在黒島郷友会

沖縄在黒島郷友会は、アジア・太平洋戦争後にふるさとを離れ、沖縄に出て来られた先輩方が異郷の地この那覇市において「肝一チ・色一チ」として心のより所として1959年(昭和34)に結成された。初代会長には仲本辰雄氏が就任、四、五十余の会員で趣旨である「郷土愛の精神を培い会員の親睦と相互扶助を目的に会の運営に当たる」ことで発足、結成されている。

結成当時、この沖縄でも思うように職がなく体一つで生きていく事が精一杯な時節、時には挫折し悲嘆に暮れるときもあった。歴代の会長をはじめ、先輩達の努力の結晶と偉業であり会員皆の一致協力の賜であり、惜しまず会活動に尽力したこの役割はかけがえのないことであった事と信じている。

郷友会活動は、今日迄1968年（昭和43）に第1回運動会が仲盛会長のもと、1972年（同47）に初の郷友会名簿が野崎会長のもと、さらに1975年（同50）に黒島郷友会誌「さふじま」が運道会長のもと創刊。同年黒島豊年祭が名城ビーチで開催、その後黒島民俗芸能保存会が結成された。

歴代郷友会長

歴代	氏名	歴代	氏名	歴代	氏名
1代	仲本辰雄	11代	運道武弘	21代	松竹敏雄
2代	宮良正富	12代	安里善好	22代	運道武三
3代	宮良正富	13代	肆手盛賢雄	23代	貝盛長幸
4代	仲盛岩義	14代	仲持真良	24代	野崎高輝
5代	貝盛長幸	15代	東舟道米三	25代	神山寛三
6代	貝盛長幸	16代	前盛安宏	26代	内間久幸
7代	玉代勢賢一	17代	本底高雄	27代	又吉瞭
8代	野崎高輝	18代	本成康浩	28代	仲本嘉公
9代	内野清	19代	神山光祐	29代	仲本嘉公
10代	黒島英吉	20代	伊古正輝		

3 関東黒島郷友会

1963年（昭和38）に開催された「黒島出身者の集い」において、出席者20名余で1月1日をもって発足。

歴代郷友会長

歴代	氏名	歴代	氏名	歴代	氏名
1代	大田正男	10代	運道高司	19代	島仲務
2代	大田正男	11代	運道高司	20代	島仲務
3代	宮良賢夫	12代	島仲実	21代	知念政演
4代	當山明良	13代	島仲実	22代	知念政演
5代	宮良長男	14代	宮良長保	23代	知念政演
6代	小浜喬志	15代	宮良長保	24代	宮良長勇
7代	當山訓生	16代	當山明良	25代	宮良長勇
8代	横目哲佳	17代	宮良賢夫	26代	兼久寛正
9代	横目哲佳	18代	島仲務	27代	兼久寛正

歴代	氏名	歴代	氏名	歴代	氏名
28代	當山明良	36代	島仲実	44代	船道常夫
29代	當山明良	37代	島仲実	45代	島仲実
30代	島仲務	38代	島仲実	46代	島仲実
31代	多良間光男	39代	當山哲司	47代	兼久寛正
32代	多良間光男	40代	當山哲司	48代	兼久寛正
33代	多良間光男	41代	船道常夫	49代	兼久寛正
34代	多良間光男	42代	船道常夫	50代	多良間光男
35代	島仲実	43代	船道常夫		

4 石垣在黑島郷友会の老人クラブ活動

時期	事項
1970年度	・ 1月、石垣在黑島郷友会老人クラブでニガウリ品評会。
1971年度	・ 第2回ニガウリ品評会。1位仲嵩比祖加、2位津田当均、3位當山賢英。 ・ 9月、真栄里老人クラブと合同親睦会を真栄里公民館で開催。
1972年度	・ 第3回ニガウリ品評会。1位仲嵩比祖加、2位生盛マワツ、3位津田当均。
1973年度	・ 総会と新年宴会開催（岡崎会館）。第2代会長・船道賢英氏。 ・ 第4回ニガウリ品評会。1位上原重信、2位津田、3位仲嵩・富里・宮良当仁。
1974年度	・ 第5回ニガウリ品評会。1位富里、津田、2位本原、宮良、西原、3位山田・上原。 ・ 9月真栄里老人クラブと観月会（日誠総業 KK 広場）
1975年度	・ 第6回ニガウリ品評会。1位富里、2位津田、3位山田、船道加那。 ・ 6月、八重山厚生園を訪問する。
1976年度 1977年度	・ 総会、並びに新年宴会。第3代会長・富里長昌。
1978年度 1979年度	・ 定期総会、並びに新年宴会を開催。第4代会長・津田当均を選任。 ・ 八重山農業試験場を見学。同場長・黒島直方の世話になる。 ・ 第9回ニガウリ品評会で1位上原重信、2位宮良当仁3位玉代勢ヨシ・津田当均表彰。 ・ 10周年記念式挙行。歴代会長へ功績を称え感謝状。
1980年度	・ 本年度定期総会、新年宴会を副会長・上原重信宅で催し、第5代会長に上原重信を選任する。 ・ 第10回ニガウリ品評会を実施。1位貝盛マカト、2位上原重信、3位大川賢一・本原正延・西原宥吉。

時 期	事 項
1981年度	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度定期総会、新年宴会を副会長・上原重信宅で催し、第5代会長に上原重信を選任する。 ・第10回ニガウリ品評会を実施。1位貝盛マカト、2位上原重信、3位大川賢一・本原正延・西原宥
1982年度	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度定期総会、並びに新年宴会を会長宅で催し、第7代会長に仲盛富太郎を選任。 ・第12回ニガウリ品評会を会長宅で実施。1位新城安信・津田当均、2位大川賢一、3位内野キク。 ・旧8月15日「十五夜あさび」の行事を実施することとし、観光バスを借りて、唐人墓、川平の黒真珠会社、大浦ダム、玉取崎展望台、市老人福祉センターなどを見学し、見聞を広めた。
1983年度	<ul style="list-style-type: none"> ・第13回ニガウリ品評会を会長宅で実施。1位知念政議・西原宥吉、2位大川賢一、3位上原重信。
1984年度	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度定期総会、並びに新年宴会を31名の会員が出席して会長宅で開催し、仲盛富太郎会長が三選され留任となる。 ・第14回ニガウリ品評会を実施。1位西原宥吉、2位玉吉秀二、3位新城安信。
1985年度	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度定期総会、並びに新年宴会を30名の会員が出席して催し、第8代会長に本原要吉を選任する。 ・第15回ニガウリ品評会を実施。1位西原宥吉、2位生盛精広、3位知念政議・上原重信。
1986年度	<ul style="list-style-type: none"> ・第16回ニガウリ品評会を実施。1位西原宥吉・貝盛新平、2位知念政議、3位津田当均。
1987年度	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度定期総会、並びに新年祝宴をあさひ食堂で催し、31名の会員が出席して、第9代会長に上原文雄を選任する。 ・第17回ニガウリ品評会を実施。22名の出席者で第1部（耕作者家庭巡り）、第2部（昼食会、審査会、表彰式）、第3部（反省祝宴）を催す。1位知念政議、2位貝盛新平、3位山田ヨシ。
1988年度	<ul style="list-style-type: none"> ・第18回ニガウリ品評会を実施。1位西原宥吉、2位本原茂雄、3位山田ヨシ
1989年度	<ul style="list-style-type: none"> ・本年度定期総会、並びに新年宴会を、県職員会館ホールで会員31名が出席して開催。第10代会長に渡久山長四を選任する。 ・第19回ニガウリ品評会は、副会長・貝盛新平宅を会場にして大雨の中実施する。今回は男性全員が審査に当たった。
1990年度	<ul style="list-style-type: none"> ・ニガウリの苗を新城安信に育ててもらい、それを持って会員の各家をまわり、一本百円で副会長・貝盛新平と会計係・本成善康が17名の耕作希望者に配布した。 ・老人クラブの創立20周年記念式典を、黒島郷友会の35周年記念式典と合同で催すことについて、歴代会長各自のご意見をお伺いしたところ、各位とも賛同してもらった。

「黒島ノート」編集後記

2016年（平成28）11月11日、竹富町史編集委員、黒島編専門部会の玻座真武氏が他界された。夏にはパソコンも新調されたばかりで、『竹富町史 第四巻 黒島』の編集作業もこれからと意気込まれていたさなかの急逝だった。残念でなりません。氏の遺志を継ぐべく、内容の充実した「黒島編」を刊行する決意である。

12月2日、玻座真武氏の『竹富町史 第四巻 黒島』の原稿データが保存されたUSBメモリーを、遺族であられる西表隆夫氏より受理した。そこでほぼ全分野にわたる29項目の原稿データが確認できた。これらの原稿について、便宜的に番号を付して示すと次のとおりである。

(1)地名、(2)人口動態、(3)創世神話・口碑伝承、(4)検地と人頭税制度、(5)戦争と黒島、(6)戦後の歩み、(7)社会教育、(8)御嶽、(9)産育、(10)婚姻、(11)葬制、(12)医療、(13)民話、(14)ことわざ、(15)農業、(16)酒造業、(17)養蚕、(18)娯楽、(19)人物、(20)郷友会、(21)年表、(22)結願祭・沖公連だより、(23)古謡・唄、(24)黒島の史跡めぐり、(25)黒島伝統民俗芸能保存会、(26)人権教育講話とその他資料、(27)人権功労瑞宝双光章、(28)医院長就任と激励祝賀会、(29)投稿文、(30)北木山風水記。

これらのうち、黒島に関するものから取捨選択し、「玻座真武 黒島ノート—玻座真武遺稿集—」と銘打ち、以下のように再編集した。なお、(5)「戦争と黒島」、(23)「古謡・唄」は、それぞれ『竹富町史だより』(第38号)、『竹富町古謡集』(第1～5集)に収録されているので、そちらをご覧いただきたい。

節	新表題（本稿の表題）	元の原稿(USBメモリー)
	はじめに	(1)の一部、(21)の一部
1	黒島に関する歴史年表	(6)、(13)の一部、(21)
2	『北木山風水記』にみる黒島	(30)
3	地名	(1)
4	人口の推移について	(2)
5	検地と人頭税制度	(4)
6	社会教育	(7)、(18)
7	信仰と祭祀	(8)
8	民俗芸能	(24)、(25)
9	人生儀礼	(9)、(10)、(11)
10	医療	(12)
11	神話・伝説・民話	(3)、(13)
12	ことわざ	(14)
13	生業・産業	(15)、(16)、(17)
14	郷友会活動	(20)

玻座真氏は最初に基礎資料として、「黒島に関する年表」を作成し、その後それぞれの項目に知り得る情報を加えながら、黒島の歴史を編んでいこうと計画されていた。そのため記述の少ないものや、メモに留まった項目も多いが、なかには玻座真氏しか知り得ない貴重な情報が散見できる。玻座真氏の思いをすべて本稿に反映することは難しいが、本稿が『竹富町史 第四巻 黒島』の編集の先導的な役割を果たすことはまちがいないと思う。とりわけ、「社会教育」の執筆を担当されたので、氏の実践を通じた記述は説得力があり、青年会、婦人会、老人会、郷友会といった任意団体が、いかに島を支えているかが理解できる。

再編集にあたって、明らかな誤りは訂正し、注記を加えることにした。また、書名(書誌データ)、曲名などは、原則的に「竹富町史島じま編」の凡例にしたがうことにした。また、氏は「人物」の記述には約80人を取りあげて意欲的に取り組まれたが、ここでは個人情報 considering、割愛することにした。

遺族の方のお許しをいただき、鳩間真英(編集委員、専門部会委員)、西表隆夫(編集委員、専門部会委員)、飯田泰彦(編集係)が訂正したところや、文体を整えたところ、補筆したところがあることを断っておく。

(竹富町史編集係)

『竹富町史 第三巻 小浜島』正誤表

『竹富町史 第三巻 小浜島』(竹富町、2011年)に3カ所の誤りがありました。ここで正誤表を提示し訂正いたします。ご確認ください。

頁	誤	正
巻頭iv	竹富町史 第二巻 小浜島	竹富町史 第三巻 小浜島
266	[写真5-2-18] 苧麻紺地松竹梅鶴亀 文様紅型舞台幕(表) [撮影:知念か ねみ、2004年(平成16)]	[写真5-2-18] 苧麻紺地松竹梅鶴亀 文様紅型舞台幕 [2004年(平成16)撮 影:知念かねみ]
267	[写真5-2-18] 苧麻紺地松竹梅鶴亀 文様紅型舞台幕(裏) [撮影:知念か ねみ]	[写真5-2-18] 苧麻紺地松竹梅鶴亀 文様紅型舞台幕 [1996年(平成8)撮 影:知念かねみ]

波照間島は、亜熱帯海洋性気候と島弧変動のもとに形成されたサンゴ礁島の自然史博物館の見本ともいわれる島である。尚、項目は『竹富町史 第七巻 波照間島』第2章「自然」の各節と対応し、それらを要約したものである。

1. 地形と地質

八重山群島の竹富島、黒島、新城島などは標高20m未満の琉球石灰岩の平坦な「平島」(ヌンゲンジマ)であるが、波照間島は同じ「平島」ながら標高59.5mの四段からなる段丘地形で、西方へ向かって緩やかに標高が低くなる傾動地形をなしている。最上段丘面には井戸や集落、かつては他の平島にはなかった水田が見られ、鍾乳洞やドリーネ、ウバーレなどのカルスト地形、高那崎断層と慶原山断層の活断層が見られるなど、独特の地形をなしている。

海岸の大半は琉球石灰岩の岩礁からなるが、他の平島には見られない変化に富んだ独特の地形が見られる。高那崎から西方の南東海岸には海拔17.5mの断崖絶壁の海食崖や海食洞、高那崎断層北側のブードゥーや北岸のニシムドゥリでは波食棚(サーフベンチ)が形成されている。また、ブードゥーの段丘には津波石といわれる大小無数の岩塊の覆瓦状構造(インプリケーション)が見られる。

一方、北海岸の大泊浜とサコダ浜、北西海岸の北浜と南浜に続く一帯の海岸には砂浜、砂堤や砂丘が続き、そこには亜熱帯の海浜植物の鬱蒼とした森林が見られる。島の中央南岸のペムチ浜と北岸の大泊浜ではビーチロックやアワ石が分布しており、塀や石段の石材として用いられた。

東と南西の沿岸には裾礁が発達しており、海拔3、4mの低い琉球石灰岩の岩礁は基部が波浪によって削り取られたひさし状の波食窪(ノッチ)を形成している。島の北西部の砂浜の前には、モースイヤフニと呼ばれる琉球石灰岩の離礁小島やキノコ岩が見られる。

島の大部分は、琉球石灰岩が風化した赤褐色を帯びた島尻マーヅと呼ばれる中性から弱アルカリ性土壌に被われている。また、北西部の西浜から大泊浜、ペムチ浜、高那崎からブードゥー周辺の海岸近くにはサンゴ起源の砂礫の沖積土壌が堆積している。島尻層の泥岩層が石灰岩の下に基盤として見られ、その一部が富嘉集落や北集落の西から前集落の北、名石集落の南にかけての凹地に局所的に露出している。

2. 水

河川がなく、かつて島の人々は井戸水と雨水を生活用水として利用してきた。数十にも及ぶ掘り抜き井戸は、不透水基盤の新第三紀島尻層群泥岩の上面部が地表近くに達する島の中央部とその西方に集中しており、そこに現在の集落が形成されている。他に、島の北方にあるシムスケー、集落内のブリゲー、保田盛ケー、北西海岸近くの明宇底ケーなどのウリゲーがあり、古くから島の祖先の命の水であったと思われる。

湧水が、北海岸付近のウダチヌパリミジー、ケーラー、大切坑の3か所に見られる。かつては雨季に北西海岸の明宇底ケーと呼ばれる湧泉から湧水が砂丘の谷を流れるのが確認されている。現在、海水淡水化施設が稼働しているが、以前は簡易水道水源としてこれらの湧水や洞穴水が利用されていた。

地下水の水質は、琉球石灰岩が溶け出したカルシウムイオンや炭酸水素イオンの濃度が高い。また、海水や海塩粒子の影響を受けてナトリウムイオンや塩化物イオンの濃度が高い。耕作地では硫酸などの化学肥料が使われており、地下水の硝酸イオンや硫酸イオンの濃度が高い。かん水淡水化施設で逆浸透膜法によって処理された透過水はこれらイオンが取り除かれ電導度が極めて低い。



ブドゥー一帯の海食棚

3. 海岸と海

昔から海と深くかかわってきた島の人々は、野良仕事の合間や冠婚葬祭の前には磯に繰り出して魚介類や海藻などを採るなど海の幸の恩恵にあずかってきた。その海への降り口であるウダチの数は50近くにもなっており、それぞれに名前が付けられ、高那とブドゥーを除くすべての海岸に見られ、特に岩礁海岸の続く南西部や東部に多く見られる。

岩礁海岸には、沿岸にリーフがなく荒波が打ちつける断崖絶壁の高那やブドゥー、ニシムドゥリなどの荒磯と沿岸にリーフや礁池がありノッチを持つサンゴ石灰岩礁が特徴のヌーピー、北の海岸、南の海岸などの穏やかな磯が見られる。砂浜海岸は北西部の北浜、西浜、北部の大泊浜、南部のペムチ浜があり、砂地の浅い礁池にはアマモなどの海草が繁茂して穏やかな波が白砂の汀線を洗う。

海岸から沿海にかけてそれぞれの構造や地形にスイビ（磯辺）、ビショー（内礁の礁原）、プカブシ（外礁の礁原）、ムンドゥリ（断崖・礁斜面）、クムリィ（タイドプール）などの詳細な名称が付けられている。それぞれの場所には特徴的な生き物が生息しており、多くの生き物に方言名が付けられているのもサンゴ礁島の特徴である。

4. 動物

動物相は他の隆起サンゴ礁からなる低島とほとんど同じであり、土壌動物とその他の小動物は27目80科112種、鳥類は60種が確認されている。鍾乳洞があるせいで他の低島には見られないカグラコウモリが生息し、野鼠駆除のために導入されたホンDOIタチの捕食によりヤシガニやキシノウエトカゲなど小動物が激減し、絶滅の危機に瀕している。

観察眼に優れた先人たちは、農作業等の生活活動に関わりのある陸生の多くの動物にもその形態や生態の特徴を捉えて方言名を付けている。例えば、リュウキュウコクタン（キナ）の果実が赤く熟する頃にこの樹木に登って実を食べるヤシガニをキナヘームゴン、7月の夜に磯に降り立ち放幼生をするヤシガニをパリャンアライムゴン（卵を洗う）などと呼んでいる。

5. 植物

琉球石灰岩低地を特徴づける植物群落形成されており、海岸はイソフサギ群集、イソマツモクビャッコウ群集、コウライシバーソナレシバ群集、クサトベラーモンパノキ群集、アダン群集、ハテルマガリ群落、テリハボク群落などからなる。石灰岩が露出し土壌が浅く少ない原野にはチガヤ、ハイキビ、ハチジョウススキなどのイネ科植物やバンジロウ、アオガンピなど見られる。

畑地にはタチアワユキセンダングサ、ツノアイアシなどの帰化植物とハマスゲ、カタバミ、アキノノゲシなどの畑地雑草が見られ、御嶽にはクワノハエノキ、リュウキュウガキ、ハマイヌビワ、アカテツ、ガジュマル、コミノクロツグなど極相林と思われる植生が残っている。集落内には暴風防火用にフクギが、クロトンやリュウキュウコクタンが観賞用として植栽され、石積みの塀にヒハツモドキ、庭にスベリビユなどが見られる。断層面の絶壁などには、ガジュマル、ハマイヌビワ、オニヤブソテツ、ミナミタニワタリなどのシダ植物、マルヤマカンコノキなどが生育している。

特定植物群落として、高那崎の海浜植物、クロボウモドキの純林が見られる白郎原御嶽の植生、阿幸侯御嶽の植生、南海岸のハテルマガリ群落、真徳利御嶽の植生、毛原崎のミズガンピ群落があげられている。

先人たちの知恵により多くの植物が有用植物として利用されてきており、食用としてアキノノゲシ、アダン、ボタンボウフウ、ホソバワダン、繊維用としてアダンの気根、コミノクロツグの葉鞘の黒毛繊維、ゲットウの葉茎などがある。物流や人の交流が盛んになったため、草本ではアメリカハマグルマ、アワユキセンダングサなど、木本ではギンネム、デイゴなど多くの帰化植物も定着している。

6. 波照間島の天文

島の神行事は農業や漁業と深く関わっており、その神行事や農作業等の段取りを決める際にはムルブシ（群星、スバルのこと）を中心にした星々や月、太陽など天体の観察が不可欠であった。国内で最も広い範囲の宇宙と揺らぎの少ない鮮明な宇宙を観測できる特長に恵まれて、私たちの祖先は太陽、月、星の動きを観測して正確な季節を推し量り、年行事、農作業、潮干狩り、航海などにその知識を生かしてきた。

神行事では、季節を把握するため冬至の晩のユーマチが公民館で受け継がれている。月については、三日月の傾きと降雨、夏至の新月・冬至の満月と潮時・潮位との関係などの言い伝えがある。星については、ムルブシと苗代作り、タタスボシと田起こし、ウトウナボシと田の草取り、ニシナナツと雑穀の播種、スカマボシと農作業などがある。また、ニーヌファブシ（北極星）と家や墓の向き、ピタコリボシと酔っぱらいの漁師、ペーブスと早魃・台風、ユツァスボシとアバアミ（油雨）の伝承を含んだ創世神話などもある。

私たちは、このような先人たちが絶えることなく脈々と語り継いできた伝承、天文の知識・知恵をしっかりと次代に伝えていかねばならない。

2017年度 竹富町史編集委員会

2017年度の竹富町史編集委員会は、第35回（7月7日）、第36回（9月29日）、第37回（12月1日）と3回開催されました。

☆第35回竹富町史編集委員会

大田綾子前教育長が6月中で勇退され、第35回竹富町史編集委員会は竹富町教育長不在のなかで開催されました。開催にあたり、石垣久雄委員長より挨拶があり、教育委員会の新体制に期待を寄せている旨が述べられました。また、社会文化課課長・新盛勝一から、2017年4月に竹富町組織機構改革に伴って、竹富町教育委員会が総務課、教育課に加え、社会文化課が新しく設けられ、そのなかで竹富町史編集係は社会文化課の一係に再編成された経緯が説明されました。また、社会文化課スタッフの自己紹介が行われました。

第35回の議題は(1)『竹富町史 第七巻 波照間島』の現状について、(2)『西表島編』『黒島編』の進捗状況について、(3)「小委員会について」、(4)『竹富町史だより』について、(5)「その他」の五つ。

第35回の議題(1)(2)では、各島編専門部会委員より各島の進捗状況の報告が述べられましたが、特に『西表島編』について具体的な章立てを提示することが求められました。

議題(5)では、竹富町史編集事業において、竹富町組織機構改革の功罪が議論されました。委員各位からは意欲的な改革の一方で、担当職員の削減、作業場と資料確保のスペースを考慮しない編集室の移動などの指摘があり、7月7日付で竹富町史編集委員会から西大舛高旬町長宛に「竹富町史編集事業の推進について要請」を行うことが決議されました。

出席者は石垣久雄、新本光孝、石垣金星、西表隆夫、上江洲儀正、大浜修、狩俣恵一、黒島精耕、玉城功一、通事孝作、鳩間真英、本田昭正、三木健、吉川安一（以上、編集委員）、新盛勝一（社会文化課課長）、飯田泰彦、上地みどり（以上、町史編集係）。

欠席者は大城肇、里井洋一、西里喜行、花井正光。

☆第36回竹富町史編集委員会

第36回も石垣久雄委員長の声高らかな挨拶で開会しました。続いて新しく竹富町教育長に就任した仲田森和から挨拶が行われ、そのなかで委員各位に対し町史編集事業への協力をお願いがありました。また、7月7日の要請を踏まえて、担当スタッフの充実に積極的に応えていくことが述べられました。

第36回の議題は『竹富町史 第七巻 波照間島』の現状について。玉城功一氏（波照間島編専門部会委員長）から『竹富町史 第七巻 波照間島』編集作業の現状報告がありました。予定した頁数（700頁）を大幅に超過するため、2分冊にして刊行することの提案があり、その章立て案が提示されました。

この報告について議論した結果、頁数が超過しても当初予定した通り1冊にまとめることになり、全体の頁数が決定したところで予算のなかで刊行冊数を調整して刊行することになりました。その際、在庫保管のスペース確保についても言及があり、それと関連して事務局から既刊書の売れ行き状

況などの報告がありました。

出席者は石垣久雄、里井洋一、新本光孝、石垣金星、西表隆夫、上江洲儀正、大浜修、狩俣恵一、玉城功一、通事孝作、鳩間真英、本田昭正、三木健、吉川安一（以上、編集委員）、新盛勝一（社会文化課課長）、飯田泰彦、上地みどり（以上、町史編集係）。

欠席者は大城肇、黒島精耕、西里喜行、花井正光。

☆第37回竹富町史編集委員会

第37回は石垣久雄委員長から挨拶があり、「竹富町史編集事業の推進について要請」（7月7日付）に応じて、早速3人体制のスタッフが確保されたことへのお礼を当局に述べ、あわせて町史編集室の移転への配慮がお願いされました。

竹富町教育長・仲田森和から、新しいスタッフ・田邊俊介の紹介があり、町史編集事業を計画通り推し進めることへの期待が述べられました。

第37回の議題は(1)『竹富町史 第七巻 波照間島』の現状について、(2)『西表島編』『黒島編』の進捗状況について、(3)「小委員会について」、(4)「発刊計画について」、(5)「その他」の五つ。

議題(1)について、玉城功一氏（波照間島編専門部会長）より、第36回の決議を受け、全体で900頁を目途に編集を進めていること、刊行部数は600冊の予定などが報告されました。また6月から毎週1回、執筆者有志が集って、1926年（大正15）生まれの島村修氏から聞き書きを行い、それをもとに提出原稿を補完する取り組みが紹介され、その成果の大きさが強調されました。

議題(2)について、石垣金星氏（西表島専門部会長）から『西表島編』、西表隆夫氏（黒島編専門部会長）から『黒島編』の進捗状況の報告が各々行われました。

西表島専門部会から『西表島編』の2分冊について、「近代開拓編（仮題）」の具体的な章立てが提示され了承されました。

黒島編専門部会の取り組みとして、2016年11月に他界された、玻座真武氏の遺稿を毎月1回有志が集って読み合わせをし、『黒島編』に活かしていく計画が述べられました。また、既に自然分野や歴史分野の原稿が提出されていることの報告もありました。

議題(3)について、狩俣恵一氏（郷友会編小委員会委員長）が郷友会資料の収集の必要性和、平成30年度の早い時期の小委員会開催に向けて準備を整える計画を述べました。新本光孝氏（自然編小委員会委員長）からは「自然編」の2分冊のうち、ビジュアル版の進捗についての報告がありました。

議題(4)については、次の表のとおり、発刊計画が確認されました。議題(5)については、町史編集室所蔵の写真の管理について議論されました。

年度	刊行	年度	刊行
平成29年度	波照間島編	平成32年度	黒島編
平成30年度	資料集 新聞集成Ⅶ	平成33年度	西表島編2（歴史・民俗編）〈仮称〉
平成31年度	西表島編1（近代開拓編）〈仮称〉		

出席者は石垣久雄、里井洋一、新本光孝、石垣金星、西表隆夫、上江洲儀正、大浜修、狩俣恵一、玉城功一、通事孝作、花井正光、本田昭正、三木健、吉川安一（以上、編集委員）、新盛勝一（社会文化課課長）、飯田泰彦、上地みどり、田邊俊介（以上、町史編集係）。

欠席者は大城肇、黒島精耕、西里喜行、鳩間真英。

竹富町史編集委員会・竹富町史編集係 2017年度の動向

10月1日 古見村結願祭

西表島古見村の結願祭が執り行われました。儀礼的な狂言「長者」では、請原御嶽に設けられた舞台いっぱいに子孫（ファーマー）が居並び、次々と踊り・狂言が奉納されました。舞踊「古見之浦節」「砥ゆば節」は古見村に由来するだけに歴史の重みを感じました。また狂言「田耕し」、「亀組」は古見村でしか見ることのできない演目で見ごたえのあるものでした。



狂言「長者」



狂言「亀組」

10月4日 竹富島十五夜

竹富島の十五夜祭では、三つの集落それぞれから、「ヤドウめ芸能」が披露されます。「ヤドウ」とは「板戸、雨戸」の意。仲筋集落からは「天人」、玻座間西集落からは「月の使い」、東集落からは「大黒」が板戸に乗って登場し、口上を述べます。そのあとは東西に分かれて綱引きが行われ、夜は集落ごとに十五夜の月を愛でながら、住民の無病息災、五穀豊穡が祈願されます。



仲筋集落「天人」



西集落「福の神」



東集落「大黒」

10月15日 黒島東筋村結願祭

黒島東筋村の結願祭が伝統芸能館で執り行われました。棒術で場を清め、儀礼的な初番狂言に始まり、舞踊「黒島口説」でフィナーレを迎える、芸能づくしの華やかな番組でした。また、久しぶりに演じられた舞踊「松竹梅鶴亀」が話題を呼びました。最後は神役、公民館役員、有志により古謡《立ていぶどん》が謡いおさめられました。



舞踊「松竹梅鶴亀」



舞踊「黒島口説」

10月20日 沖縄県地域史協議会(於・金武町)

今年度の沖縄県地域史協議会研修は、7月21日に豊見城市、10月20日に金武町で開催されました。町史編集係にとって唯一の研修であることや、県内市町村史編集の情報交換の場として、何かと学ぶことの多い刺激的な研修会です。

写真は「金武町巡見コース」からの2葉で、金武町の金武観音寺と琉球古典音楽《金武節》の琉歌碑です。後者は「こばや金武こばに 竹や安富祖竹 やねや瀬良垣に 張りや恩納」(クバは金武で取り 竹は安富祖で取り 瀬良垣では竹を細く削り 恩納ではクバ笠を仕上げた)とうたったものです。この琉歌は金武、安富祖、瀬良垣、恩納と続く山原路の道程と、クバ笠作りの工程に重ね合わせた表現となっています。



金武観音寺



琉歌碑〈金武節〉

12月 竹富町教育委員会、町史編集室移転

竹富町教育委員会、町史編集室が新栄町6-18番地(石垣市IT事業支援センター3階)に引越しました。町史編集係はこれまで教育委員会から離れた場所での勤務でしたが、12月からワンフロアのなかに場所・書棚が確保されました。今後、町史編集事業が教育委員会の組織のなかでより機能的に進められるものと思います。



1月28日 「平成29年度沖縄県伝統芸能公演重要無形文化財保持者等公演」

(於・竹富町離島振興総合センター)

沖縄県の重要無形文化財保持者による琉球舞踊「本貫花」「木綿花」、組踊「手水の縁」、沖縄芝居「愛の雨傘」に加え、竹富町からは舞踊「くいぬばな節」(新城民俗芸能保存会)、「碇ゆば節」(古見民俗芸能保存会)が演じられました。会場には大勢の住民が集い、歌と踊り、芝居を堪能しました。



舞踊「碇ゆば節」



沖縄芝居「愛の雨傘」



組踊「手水の縁」



2月10日 やまねこマラソン

「第25回竹富町やまねこマラソン」が“さわやかに西表島の大自然を走ろう！”をテーマに開催されました。上原小学校をスタート地点として3km、10km、23kmのコースに分かれ、西表の大自然の中さわやかな汗を流しました。日本全国から1,347名のランナーがエントリーし、各々が目標達成に向けて取り組みました。天候にも恵まれ盛況のうちに幕を閉じた、大会後には中野わいわいホールでふれあいパーティも開催されました。



- 3月31日 町史編集室引越作業（→4月2日）。
- 4月1日 竹富町史編集係が竹富町組織機構改革に伴い、竹富町教育委員会社会文化課に編成。
- 4月6日 黒島編執筆者有志ミーティング。
- 4月12日 玻座真武氏の遺稿の扱いについて玻座真家宅訪問。
- 4月20日 「竹富町史編集事業の推進」について緊急臨時会議。
→石垣久雄、三木健、黒島精耕、玉城功一、通事孝作、西表隆夫、島村賢正出席。
- 5月1日 美崎倉庫片付け。
町史編集委員有志、波照間島編専門部会から西大舩高句町長に「竹富町史編集事業の推進について要請」（→5月18日）。
- 5月2日 大城辰彦氏より大富エイサーの写真寄贈あり。
- 5月17日 竹富町体育協会理事会に職員1人出席。
- 5月18日 町史編集委員有志による「竹富町史編集事業の推進について要請」（於・町長室）。
- 6月2日 竹富公民館（竹富青年会、ぶなる会）に既刊書寄贈。
- 6月5日 美崎倉庫片付け。
- 6月7日 波照間島編専門部会ミーティング。島村修氏より聞き書き。
- 6月9日 黒島編執筆者有志ミーティング。
- 6月11日 竹富町球技大会。
- 6月13日 県立図書館蔵書からの選書。美崎倉庫片付け。
- 6月14日 波照間島編専門部会ミーティング。島村修氏より聞き書き。
- 6月15日 沖縄タイムス70周年取材に職員1人同行、石垣金星氏の案内あり（→6月17日）。
- 6月29日 美崎倉庫片付け。
- 7月4日 黒島旧正月大綱引き衣裳復元の話合いに職員1人出席。
- 7月5日 波照間島編執筆者有志ミーティング。
- 7月7日 第35回竹富町史編集委員会開催。
→竹富町史編集委員会より西大舩高句町長に「竹富町史編集事業の推進について要請」。
- 7月10日 アウエハント静子氏より『HATERUMA』の寄贈。
- 7月12日 仲田森和教育長就任。

- 7月13日 美崎倉庫片付け。
- 7月18日 大城學氏、豊見山和行氏より、鳩間島小浜家の板証文について報告。
- 7月19日 波照間島編執筆者有志ミーティング。
執筆者・古谷野洋子氏を交えて、島村修氏より聞き書き。
- 7月21日 2017年度地域史協議会に職員1人出席（於・豊見城市）。
- 7月26日 波照間島編執筆者有志ミーティング。島村修氏より聞き書き。
- 8月2日 波照間島編執筆者有志ミーティング。島村修氏より聞き書き。
- 8月3日 美崎倉庫片付け（→8月18日）。
- 8月8日 波照間島編執筆者有志ミーティング。島村修氏より聞き書き。
- 8月9日 黒島編執筆者有志ミーティング。
- 8月15日 波照間島編補足原稿不切。
- 8月18日 大城學氏より鳩間島小浜家板証文の返却。
- 8月19日 第32回沖縄少年の主張大会八重山地区大会スタッフ。
- 8月23日 波照間島編執筆者有志ミーティング。島村修氏より聞き書き。
- 8月25日 波照間島編執筆者有志ミーティング。
- 8月29日 波照間島編執筆者有志ミーティング。島村修氏より聞き書き。
仲田教育長、新盛課長、宜間補佐、石垣久雄委員長を交えて波照間島編の現状報告。
- 9月2日 竹富町スポーツ少年団交流大会。
- 9月8日 黒島編執筆者有志ミーティング。
- 9月12日 慶應義塾大学学生による民俗調査に対応。
- 9月20日 波照間島編執筆者有志ミーティング。島村修氏より聞き書き。
- 9月26日 沖縄県文化課との民俗調査について意見交換（新盛課長、山城文化財係長同席）。
- 9月27日 波照間島編執筆者有志ミーティング。島村修氏より聞き書き。
- 9月29日 第36回竹富町史編集委員会開催（午後）。西表島編専門部会ミーティング（午前）。
- 10月1日 古見結願祭の取材と撮影。
- 10月4日 竹富島十五夜の取材と撮影。
- 10月5日 波照間島編執筆者有志ミーティング。島村修氏より聞き書き。
- 10月10日 黒島編執筆者有志ミーティング。美崎倉庫片付け。
- 10月11日 波照間島編執筆者有志ミーティング。島村修氏より聞き書き。
内閣府の戦災調査に原稿「竹富町の戦災について」提出。
- 10月15日 黒島結願祭の取材と撮影。
- 10月20日 沖縄県地域史協議会職員に1人出席（於・金武町）。
- 10月25日 教育委員会移転先見学。
- 10月27日 沖縄県公民館研究会のスタッフ（於・石垣市民会館）。
- 11月10日 山城千秋氏（熊本大学）に教育委員会所蔵青年会資料を提供（→20日返却）。
- 11月13日 波照間島編執筆者有志ミーティング。島村修氏より聞き書き。
倉庫の雨漏りにより販売書籍を移動。
- 11月15日 行政手続法・条例基準講習会に職員1人出席。
- 11月16日 新本光孝氏より『黒島編』の自然分野の現状報告。

- 12月1日 第37回竹富町史編集委員会開催。田邊俊介初勤務。
- 12月2日 竹富町教育委員会が新栄町6-18番地に移転（→12月3日）。
- 12月11日 黒島編執筆者有志ミーティング。
- 12月14日 波照間島在住執筆者とミーティング（於・波照間島）。
- 12月26日 波照間島編執筆者有志ミーティング。
- 12月28日 仕事納め。
- 1月4日 仕事始め。
- 1月9日 黒島編執筆者有志ミーティング。
- 1月17日 波照間島編執筆者有志ミーティング。
- 1月28日 「平成29年度沖縄県伝統芸能公演重要無形文化財保持者等公演」のスタッフ（於・竹富町離島振興総合センター）。
- 2月10日 やまねこマラソン。
- 2月13日 黒島編執筆者有志ミーティング。
- 2月14日 波照間島編執筆者有志ミーティング。黒島旧正月案内掲載。
- 2月21日 村田行氏より、1980～1983年にかけて西表島西部地区の祭事など撮影した、スライドフィルム約200点の寄贈あり。
- 2月23日 波照間島編執筆者有志ミーティング。

島じまの踊り・狂言 〈No.2〉

曾我兄弟

「曾我兄弟」は歌舞伎の仇討物として知られていますが、八重山では竹富島の種子取祭で毎年演じられる定番の狂言として有名です。竹富島の「曾我兄弟」は石垣島で上映された映画を演劇化したものと伝えられています。

これまでには黒島でも「曾我兄弟」の上演記録がありますが、かつて西表島古見村でも演じられたとのこと。2017年（平成29）、古見村の結願祭で「曾我兄弟」が久々に舞台にかけられました。八重山の島々村々で「曾我兄弟」がどのように受容され、展開されたのか、たいへん興味深いところです。

これらの事例からは、近現代における芝居や映画も島々村々の芸能に影響を及ぼしたことが分かります。とはいっても、それぞれ独自に演出された「曾我兄弟」が島人にくり返し演じられ、継承されてきました。そして「曾我兄弟」は、我が島（村）の誇り高き芸能として確立してきました。



古見村結願祭



竹富島種取祭（玻座真村）

2017年度受贈図書一覧

多数の個人、関係機関等からの御寄贈、誠にありがとうございます。

受贈図書 (発行年、編著者)	寄贈者芳名
アジアの人々へ読んでもらいたい 沖縄県産本50冊 (2016年、東アジア出版人会議実行委員会)	沖縄県文化振興会、遠藤、山本
石垣市史 資料編近代8 大浜町・石垣市合併関係資料集 (2017年、石垣市史編集委員会)	石垣市教育委員会
石垣市文化財調査報告書第36号 舟蔵第二貝塚一ホテル建設に伴う緊急発掘調査一 (2017年、石垣市教育委員会)	石垣市教育委員会
糸満市史 資料編13 村落資料―旧糸満町編―(2016年、糸満市教育委員)	糸満市教育委員会
西表島研究2015 東海大学沖縄地域研究センター所報 (2016年、東海大学沖縄地域研究センター)	東海大学沖縄地域研究センター
沖縄県史 各論編 第六巻 沖縄戦 (2017年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班編)	沖縄県教育委員会
沖縄県史だより〈第26号〉(2017年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班編)	沖縄県教育委員会
沖縄在波照間郷友会創立20周年記念誌 (1982年、沖縄在波照間郷友会)	本田昭正
沖縄在波照間郷友会創立40周年記念誌 (2002年、沖縄在波照間郷友会)	本田昭正
沖縄史料編集紀要〈第40号〉 (2017年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班編)	沖縄県教育委員会
「沖縄籍民」の台湾引揚げ証言・資料集 (2018年、赤嶺守編)	赤嶺 守
沖縄文化活性化・創造発信支援事業も 交流会 民俗芸能の継承を考える 報告書 (2016年度) (2017年、与那国町)	与那国町、小池康仁
沖縄文化研究44 (2017年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
広報よなぐに〈第92号〉 (2017年、与那国町役場)	与那国町、小池康仁
出版の地域性と書物の普遍性 10周年の総括と東アジア書物交流の課題―第21回東アジア出版人会議10周年記念沖縄会議― (2016年、東アジア出版人会議実行委員会)	沖縄県文化振興会、遠藤、山本
新八重山 一博覧会記念誌一 (1950年、記念誌編纂会)	本田昭正
図録 東海大学75年 (2017年、東海大学75年史編集委員会)	東海大学
中琉歴史関係档案 道光朝〈6〉 (2016年、中国第一歴史档案館)	沖縄県教育委員会
中琉歴史関係档案 道光朝〈7〉 (2016年、中国第一歴史档案館)	沖縄県教育委員会
中琉歴史関係档案 道光朝〈8〉 (2016年、中国第一歴史档案館)	沖縄県教育委員会
豊見城市史 第4巻 移民編〈本論〉 (2016年、豊見城市役所)	豊見城市役所
豊見城市史 第4巻 移民編〈証言・資料〉 (2016年、豊見城市役所)	豊見城市役所
南島 第二輯 (1942年、南島発行所)	玉城功一
南島 第三輯 (1944年、宮古民族文化研究所)	玉城功一

ノロ ―沖縄県北中城村「島袋のろ殿内資料」を通して― (2017年、北中城村教育委員会)	北中城村教育委員会
波照間島 ―東京波照間郷友会創立30年記念誌― (2007年、東京波照間郷友会創立三〇周年記念誌編集委員会編)	本田昭正
波照間婦人会50年の歩み (1982年、波照間婦人会)	西前津松市
八重山探検隊 レポート集 (2015年、八重山探検隊)	八重山探検隊
八重山 東京・八重山郷友会創立50周年記念誌 (1975年、東京八重山郷友会創立五十周年記念誌編集委員会)	本田昭正
琉球・沖縄における石造物についての―考察―素材性から見た造形表現を中心に― [筑波大学芸術専門学群卒業論文] (2017年、大城実結)	大城実結
琉球・中国交渉史に関するシンポジウム論文集 (第11回) (2016年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育委員会
琉球の方言41 (2017年、法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
歴代宝案 校訂本第15冊 (2016年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育委員会
歴代宝案編集参考資料16 『歴代宝案』校訂本解説集 (2017年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育委員会
歴代宝案編集参考資料17 『歴代宝案』訳注本第4冊 語注一覧表 (2017年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育委員会
歴代宝案 訳注本 第4冊 (2017年、沖縄県教育庁文化財課史料編集班)	沖縄県教育委員会
『歴代宝案』を読むための用語解説 [『歴代宝案』訳注本第二冊 抜刷] (1997年、沖縄県教育委員会)	沖縄県教育委員会
わったーたからむん ていみぐすくくとぅば―伝えよう私たちの宝物豊見城言葉― (2016年、豊見城市教育委員会)	豊見城市教育委員会
HATERUMA ―波照間：南琉球の島嶼文化における社会＝宗教的諸相― (2004年、著／コルネリウス＝アウエハント、訳・解説／中鉢良護、監修／静子＝アウエハント・比嘉政夫)	静子＝アウエハント
HIMEYURI PEACE MUSEUM The Guidebook (2016年、ひめゆり平和祈念財団)	ひめゆり平和祈念資料館
DVD 黒島の伝統芸能祭 (2017年、石垣在黒島郷友会)	玻座真花子

竹富町史の刊行物一覧

No.	書 籍 名	発行年度	税抜価格
1	竹富町別巻② 竹富町史文献目録	1990年度	
2	竹富町史 別巻③ 写真集「ばいぬしまじま」	1992年度	¥2,500
3	竹富町史 第十巻 資料編「近代1－喜宝院蒐集館文書」	2004年度	¥2,500
4	竹富町史 第十巻 資料編「近代2－必要書・必要書類集」	2001年度	¥2,500
5	竹富町史 第十巻 資料編「近代3－新城村頭の日誌」	2005年度	¥2,500
6	竹富町史 第十巻資料編「近代4－官報にみる八重山」	2006年度	¥2,500
7	竹富町史 第十巻資料編「近代5－波照間島近代資料集」	2009年度	¥2,500
8	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅰ」	1993年度	¥2,000
9	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅱ」	1994年度	¥2,000
10	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅲ」	1996年度	¥2,000
11	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅳ」	2000年度	¥2,000
12	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅴ」	2002年度	¥2,000
13	竹富町史 第十一巻 資料編「新聞集成Ⅵ」	2003年度	¥2,000
14	竹富町史 第十二巻 資料編「戦争体験記録」	1995年度	¥3,000
15	竹富町制施行50周年記念誌 「ばいぬしまじま50」	1998年度	¥2,500
16	竹富町史 資料集① 「鉄田義司日記」	1999年度	
17	竹富町史 第二巻 竹富島	2011年度	¥3,000
18	竹富町史 第三巻 小浜島	2011年度	¥3,000
19	竹富町史 第五巻 新城島	2013年度	¥3,000
20	竹富町史 第六巻 鳩間島	2014年度	¥3,000

編 集 後 記

2017年度は竹富町組織機構改革に伴って、町史編集室の度重なる引越や所蔵資料の移動がありました。12月ようやく落ち着くことができました。竹富町史編集室は、石垣市IT事業支援センター3階の竹富町教育委員会のなかにスペースが確保され、スタッフも3人体制で新たにスタートを切りました。どうぞよろしくお願ひします。

ところで、『日本歴史』（2018年1月号、日本歴史学会編）は「自治体史を使いこなす」と銘打った新年特集が編まれていました。そのなかで平良勝保氏（沖縄大学非常勤講師、宮古島市史編集委員）が、竹富町史の「島じま編」シリーズについて、「住民のための身近な歴史を提供するという意味において、現時点では最も理想的なスタイル」と紹介してくれています（「沖縄県における自治体史編集の歴史と現状」）。

平良氏の評は、「町民参加の町史づくり」をモットーとしているだけに、たいへんうれしいものでした。また、「通史編」「資料編」「島じま編」を三本柱とする竹富町史基本構想とも響きあうものです。それは資史料の収集（「資料編」）の積み上げと「島じま編」の成果に基づいて、竹富町としての「通史」（編）を浮かび上がらせようとするものです。つまり、個々の島（地域）の歴史・文化を明らめながら、自治体の通史を叙述していこうというスタイルです。

本号は『竹富町史だより』（第40・41合併号）というかたちでお届けしました。中心となる内容は、竹富町史編集委員、黒島編専門部会長であられた玻座真武氏の遺稿を編集し、ボリュームたっぷりの号となりました。その経緯の詳細は、「玻座間武黒島ノート 編集後記」をご覧ください。玻座真氏の遺志を継ぐべく、『竹富町史 第四巻 黒島』の平成32年度発刊に向けて取り組み、竹富町史編集事業を推し進めていく決意です。

2018年3月30日発行

竹 富 町 史 だ よ り

第40・41合併号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市新栄町6-18

TEL 0980-87-6257

e-mail : taketomi-choshi@town.taketomi.okinawa.jp